
魔法少女リリカルなのは～Nameless Ghost～（設定資料集）

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜Nameless Ghost〜（設定資料集）

【Nコード】

N15480

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

これは、魔法少女リリカルなのは〜Nameless Ghost〜全般の設定資料集です。本編のネタバレを含む場合がありますのでご注意ください。

Route NML 設定集(1) (前書き)

Route NMLの設定となります。以前は本編中に記載していた物ですが、これを本編中に置くと物語の流れを分断してしまうという問題があったため、誠に勝手ながら別で立ち上げることとしました。

また、以下には本編のネタバレ的要素が存在しますので、閲覧には十分ご注意ください。

Route NML 設定集(1)

人物

・ベルディナ・アーク・ブルーネス

年齢 318歳(享年)

性別 男

出身 古代ベルカ王国領、スラム街、元ストリートチルドレン

両親 Unknown

保護者 ソフィア・アーク・ブルーネス

魔導師ランク Unknown(推定SSSランク)

傾向 愉快型

趣味 酒、煙草、ギャンブル、女

資産 8億7000万ミッドガルド(補足:1ミッドガルド 1000円)

取得魔法 アーク式魔術

保有資格 特になし

階級 特になし

戦闘スタイル 中距離射撃制圧および高速機動近接格闘、CQBの達人

保有デバイス 魔剣ブリュドガラン(翔天の剣) <遺失>

物語冒頭でユーノをかばって次元世界に爆散した人物。

物語が始まった早々に死ぬなんてどこの「幽。白書」? みたいな感じですが。

出身は古代ベルカで、古代大戦終了後は各地を放浪しては戦場で戦うというダーティーな人生を歩む。

スクライア族に身を寄せたのは、餓死寸前で生きだおれていたと

ころスクライアの青年（現在族長）に拾われたため。その後、一宿一飯の恩義をかねてスクライアの手伝いをするにつれ彼の経験と知識が大いに役に立ち、そのまま20年ほど逗留することとなった。

物語冒頭の8年前に災害で孤児になったユーノを拾い、彼をスクライアの一族に入れると同時に責任を持って育てることとなる。

・アリシア・テストロッサ

年齢 登録年齢5歳（経歴年齢31歳）

性別 女

出身 ミッドチルダ南部アルトセイム

両親 プレシア・テストロッサ（母）

父不明

保護者 リンディ・ハラオウン

魔導師ランク Unknown（推定F）

傾向 愉快型

趣味 読書

資産 月5ミッドガルドの小遣い、翻訳の報酬月額およ

そ50ミッドガルド

取得魔法 アーク式魔術

保有資格 特になし

階級 リンディ・ハラオウン付き民間協力者

戦闘スタイル 戦術指揮、情報搜索

保有デバイス バルディッシュ・プレシード

コンソールデバイス<タグボード>

プレシア・テストロッサの娘。26年前に発生したヒュードラの事件でなくなり、プレシアの人生を変えた。フェイト・テストロッサのオリジナルで、生前は活発で人見知りしない性格だったらしい。そのため、母の研究チームのマスコットとしてかわいがられていた様子。物語冒頭、プレシアがジュエルシードを発動させる寸前にベ

ルディナの意識が憑依し復活。

ベルディナを前世として、彼の意識と記憶、知識と経験を受け継ぐため、年相応として見られることは皆無である。フェイトの姉として彼女を見守ろうとするが、何かとすれ違いは多そう。傍若無人自分勝手に悪質ないたずらが大好きで人をからかって遊ぶ気質がある。しかし、雇い主であり保護者であるリンディの言うことには逆らえない様子。

産まれながら色素が薄いためか、太陽の光に弱く、外を出歩くには入念なスキンケアとサングラスに帽子が必要になる。そのため、基本的に太陽の光とは縁遠い管理局の本局の環境を好ましく思っている様子。

物語の最後でベルディナの意識が本来のアリシアの意識と融合し、新たに独立したとして新生する（フェイトと、アリシアの中に残る本来のアリシアとしての意識と記憶が闇の書の情報の海の中で再構成されたもの：故に本来的にはアリシアではないが、実質的には最もアリシアに近い存在となる）。

・フェイト・テストロッサ（・ハラオウン）

年齢 9歳（推定）

性別 女

出身 時の庭園

両親 プレシア・テストロッサ（製造者）

保護者 リンディ・ハラオウン

魔導師ランク A A A

傾向 純粹

資産 月10ミッドガルドの小遣い、囑託魔導師報酬月

額およそ800ミッドガルド

習得魔法 ミッドチルダ式

保有資格 空戦資格、囑託資格
 階級 囑託魔導師
 戦闘スタイル 高速機動戦闘
 保有デバイス バルディッシュ、
 （後）バルディッシュ・アサルト、バルディッシュ・プレシード

アリシアの妹でプレシアの娘。実際はアリシアのクローン。幼い頃から魔導師として英才教育を受けたことから並の魔導師では太刀打ちできない戦力を保有する。戦闘では非常にシャープで判断力、身のこなし共に一流だが、日常生活では世間知らずから来るうっかりが目立つ様子。

アリシアからは「愚妹」とか「馬鹿な妹」とか言われているがめない。姿形はアリシアとほとんど同じだが、アリシアのような太陽に弱い性質は改善されている様子。
 純粹で人を疑わない性質が目立つため、アリシアからは少し危惧されている。

・ユーノ・スクライア（・ハラウン）

年齢 9歳
 性別 男
 出身 スクライアの部族
 両親 不明
 保護者 ベルディナ・アーク・ブルーネス（育ての親：故人）

（後）リンディ・ハラウン（保護者）

ギル・グレアム（地球での後見人）

魔導師ランク A+（事故後、AA+）

傾向 知的、若干つつこみ系、ちょこつと意地悪

資産 100万ミッドガルド（ハラウン家に入った後

はリンディの預かりとなる）

習得魔法	ミッドチルダ式
保有資格	発掘指揮、クラナガン国立学問所魔法学園卒業資格
階級	アースラ民間協力者
戦闘スタイル	支援戦闘
保有デバイス	ジェイド・ブロッサム（魔力出力安定化装置）

元ミッドチルダのスクライア族の出身。ジュエルシードの事故に巻き込まれ、地球に漂着する。そのまま地球でジュエルシードの回収に乗り出すが、地球との魔力の不適合と準備不足、負傷により行動不能となる。その後、高町なのはに救われ、彼女にレイジングハートを手渡す。

ベルディナが自分を守って死んだことを自分の責任と誤解し、その後、無理無茶無謀を絵に描いたような行動を取るが、それらを高町なのはによって厳しく諫められて和解。なのはの厚意を素直に受け入れるようになる。

P T事件が解決した後、地球に移住することとなり、ベルディナに残された資産から100万ミッドガルドを手渡され、正式に地球にすむこととなる。

結界師としての能力は折り紙つきで、さらには後衛にとどまらず前衛を張れる程の技量を持つ珍しい結界師でもある。戦闘力は高くないが、知的な事柄に関してはピカ一。

・高町なのは

年齢	9歳
性別	女
出身	第97管理外世界地球日本国海鳴市
両親	高町士郎 高町桃子
保護者	同上

魔導師ランク A A A

傾向 純粹、巻き込まれ系、ちよっぴり焼き餅焼き

資産 月10000円の小遣い

習得魔法 ミッドチルダ式

保有資格 特になし

階級 聖祥小学校三年生、アースラ民間協力者

戦闘スタイル 射撃、砲撃制圧型。後マルチロール

保有デバイス レイジングハート

（後）レイジングハート・エクセリオン

地球出身の魔導師。PT事件でユーノに協力し、ともに事件の解決に貢献した。

・レイジングハート

年齢 「覚えていません。実稼働はおよそ40年ほど。

作られたのはおよそ1000年前といったところ

でしょうか？」

性別 「さあ？」

出身 「どこでしょうねえ」

両親 「私がすべてのデバイスの母です」

保護者 「所有者は高町なのはです」

家族 「マスターはもちろん、ユーノとベルディナは私

の大切な家族と認識しています」

魔導師ランク 「魔導師ではありませんので」

傾向 「私がおもしろければ基本的にはなんでも」

資産 「本体価格は時価数千万ミッドガルドと言われて

います」

習得魔法 「ミッドチルダ式です」

保有資格 「資格は取れませんので」

階級 「世界最古にして最強のデバイスです（自称）」

戦闘スタイル 「ありとあらゆる状況に対応して見せますよ?」
保有デバイス 「私が所有するものは私のみです」

デバイス

<バルディッシュ・プレシード>

フェイトの所有するバルディッシュの実験機。バルディッシュに組み込むシステムや魔法のテストを行うために制作されたデバイスで実用を考慮されたものではない。

故にフレーム強度、演算装置のリソースに大きな問題を残す。

アリシアに譲渡された後に全面的に改修される。アリシアの要求でフレームの強化と情報収集および情報処理に特化した構成となる。
セットアップ
正式起動すれば一応武器の形になるが、それをするにはアリシアの成長を待つ必要がある。

正式起動しなくても情報端末としての機能は充実しているので、アリシアはもっぱらその方向での使用を行う。

バルディッシュのテスト機としてカートリッジシステムが搭載され、そのままリエルの次世代デバイスの概念実証のために様々な活用された後、データ収集を終え、フェイトに手渡されることとなる。

フェイトに渡る際にさらに改良が加えられ、速度を重視するあまり防御を捨ててしまったフェイトのために高性能の自動防御機能を搭載することとなる。

フルドライブ時にはバルディッシュと合体し、最大斬撃魔法【Jet Zamber Execution Pillar】が使用可能となる。

搭載魔法・オートディフェンサー

オート・ラウンドシールド

比較的防御能力が薄く、即応性がきわめて高いオート・ディフェ

ンサーで初期防御を行い、それによって生じた余裕時間を持つてラウンドシールドをそのプロテクションの内側で発動させる。それによって即応性と強度を確保する。

ディフェンサー発動後、ラウンドシールドの発動までおよそ0.5秒。

シーケンスは同時に実行されるがラウンドシールドの方が発動が遅い。

ほとんどシークタイムなしで発動できるのはユーノぐらいである。

<レイジングハートIIエクセリオン>

世界最古にして最強のデバイスを名乗る。その出生は謎に包まれているが、少なくとも1000年前にはすでに封印状態に会った模様。あらゆるデバイスの先駆けとして制作された古代の戦闘兵器。リンカーコアの魔力を有効活用すること、独自の思考により使用者を情報と精神両面にサポートすることを目的にAIが搭載される。40年前、ベルディナがとある施設跡から発見し、そのまま持ち歩いていた。その間、ベルディナの影響を多々受け、このAIもベルディナ同様愉快型の性質を得た。

非常に気位が高いデバイスで、信頼の置ける人物でなければ自分をさわらせたがらない。

高町なのはとは非常に相性が良い。

物語序盤ではそのほとんどの機能や武装をベルディナの手によって封印されており、物語中盤でその真の姿を示す。

(以下各種モード説明)

ベーシック・モード

通常形態。見た目はそれまでのレイジングハートと変化していないが、中身は全く別物。どちらかといえば射撃能力に秀でる。

(初出：従章第十一話)

- ・アクティブレーダー×1
- ・イルミネーター×3（すべて手動制御）
- ・小型大出力魔導炉×1（出力400MW）

ストライク・モード

近接機能付加形態。見た目は長槍。ストライク・フレームと呼ばれる先端を持つフォーム。

処女戦闘に置いて、近接戦闘の機能不足と、警告や目標情報に関する情報支援に問題があったこと、機体と使用者との間のインターフェイスが音声だけだったことが問題とされ、それを解決するためにABISSとEPMを追加した。また、イルミネーターの運用に關しても見直され、イルミネーターの数を3から2に落とし、片方を半自動制御にした。（初出：従章第十八話）

- ・アクティブレーダー×1
- ・イルミネーター×2（手動制御と半自動制御の二基）
- ・ABISS（航空及び戦闘情報支援システム；Aviation and Battle Information Support System：作品中ではアビオニクスと呼称していた）
- ・EPM（Eyes Projecting Monitor）
- ・ストライクフレーム

先端から伸びる細目の魔力刃。貫通性能はそこそこだが、あくまで補助的な要素で大した攻撃力はない。実際、この作品でなのはがこれを実戦使用した描写はない（はず）。

ストライク・モードAWS

ストライクモードに外部拡張モジュールAWを追加武装した状態。全域戦闘形態として、近接、中距離、長距離に関して火力と防御力を保持しながら高速機動を実現させる状態。マルチロール型デバ

スとして極めて完成されたもので、これより向こう20年は大規模な改修や改良が必要でなかったほど（むしろ、この使用者がこれを扱いきれるかどうかの問題となる）。

その防御力で滅多なことでは落とされないが、AWの高加速度による姿勢制御を応用すれば十分高速機動戦闘の相手と張り合うことが出来る。

なのは最後の欠点であった機動力を確保するための最終手段であり、これを持って理想のための道具は用意されたこととなる。

レガシーのストライクモードからアクティブレーダーを一基増設し、精度と探査距離を伸ばすことで高速機動戦闘でも問題なく情報支援を行えるようにし、イルミネーターを一基完全自動制御とすることで復活させている。

なお、半自動制御方式のイルミネーターもマイナーチェンジしており、術者の視線に追従する形となっている。つまり、そちらに目を向けるだけで魔法弾頭がその方向に追従してくれるというもの。例え、目標が視界から消えても完全自動制御のイルミネーターが追従を続け、手動制御のイルミネーターは視線やその他に影響せず自由に動かせる。

この後、レイジングハートはこのモードをベーシックとする。

（初出：遷章第十話）

モジュール>

・アクティブレーダー×2

近接機動戦闘用にサンプリング周波数を倍増し、走査角度を短縮することで精度と有効範囲を伸ばした：それまで一基で360度全周探索していたのを、二基に増設することで一基あたり180度半球探索ですむようになり、リアルタイム性と索敵距離、精度と速度に対する追尾性が増した

・イルミネーター×3

手動制御と半自動制御（視線追従型）、完全自動制御の三基

・T I S S

T a c t i c a l I n f o r m a t i o n S u p p o r t

S y s t e m : 戦術情報支援システム近接、高機動戦闘にも対応

・E P M (E y e P r o j e c t i n g M o n i t o r)

・A W S (A r t i f i c i a l W i n g S y s t e m)

・スーパードアクセル・ウィング

高加速翼。全体的に重い装備のなのはを莫大な加速力で無理矢理高速機動に持ち込むという荒技。何かを達成するために、何かを犠牲にさせないというアリシアのコンセプトが如実に表れたもの。

制御翼はストライクモードのレイジングハートのフレームから展開し、先端部分の装甲が開き、そこから三対計六枚の桃色の翼が展開する。

開発のモチーフにしたものは、ヴィータのラケーテン。

翼が三枚というのは三次元空間であらゆる方向にベクトルを向けることが出来ると言うことから。スーパードアクセル・ウィングが起動した際には、それまでの通常のアクセル・フィンはロール角・ピッチ角・ヨー角の制御を行うように変更される。

当初は、なのはの背中に三対の光の羽を生やそうかとも思ったが、それでは闇の書のスレイプニールとかぶるのでやめ、原作のエクセリオン・バスターACSのビジュアルだけを再現した。

ちなみに、このシステムはインストーラーが入ったデータディスクの形でクリスマスプレゼントとして渡された。

ガンナー・モード

射撃特化型のモード。イルミネーターの効率運用を主眼に置かれた形態。アクティブレーダー増設し、一基あたりの走査範囲を狭めることで索敵距離を伸ばした。

イルミネーターも一基を手動制御、二基を半自動制御、一基を完全自動制御とする三基を定常起動させている。完全自動のイルミ

ネーターは使用者の死角を主にサポートする。

また、アクティブレーダーの出力も向上しているため、アクティブレーダーの範囲内の敵に対してはその反射波を利用してイルミネーターの数によらない同時迎撃機能を保持する。

（初出：なし（設定のみ））

・アクティブレーダー×4

・イルミネーター×4

手動制御と半自動制御二基（内一基は視線追従型）、完全自動制御の四基

・T I S S

・E P M

・サイドワインダー

近距離及び中距離の迎撃弾。イルミネーターではなく、高性能化したアクティブレーダーの反射波を利用しているため、アクセル・シューターのようなイルミネーターで常に目標を追従させておく必要が無く、術者は特にそれに意識を割く必要もない。いわば、打ちっ放しに出来る魔法弾頭。

アクティブレーダーの反射波を使用するため射程が短く、極めて高精度の誘導性能を確保するために弾頭一発あたりにかかる魔力コストがアクセル・シューターに比べれば爆発的に向上している。

アクセル・シューターとはまったく真逆のコンセプト。弾頭数、弾速、射程をある程度犠牲にすることで高精度かつ、極めて扱いやすい構成となっている。

キャノン・モード

砲撃特化型のモード。二股の先端がさらに拡張し巨大化し、そこに何重もの魔力加速の魔法陣が展開する。レールガンのような様相をしめす。

周りには多くの冷却用機材が備えられ、見た目は常に蒸気（冷媒

となるガス）が立ちこめているようになる。

照準と把持がしやすいように、フレームにバーチカル・フォアグリップが設えられる。

スターライト・ブレイカーを放つ際は、魔導炉を一時的に全力運転（出力100パーセント）し、なのはが制御しきれない魔力（出力のおよそ70パーセントほど）はそのままの状態で外部放出。魔力収束でその余剰分も使用するためにパフォーマンスが良く、魔導炉の魔力はなのはの魔力に適合させているために他者の魔力を調理する必要もない。すべて自前で行えるため、場合によれば初撃でスターライト・ブレイカーを放つことも可能。

原作では周囲の空間から流星のように魔力をかき集めるエフェクトだが、このシステムを使用すればレイジングハート本体から流星のように魔力が先端に収束していくといったエフェクトになる。

魔導炉の全力運転は恒常的に行ったとしても安全率がしつかりと確保されているので、レイジングハートとしては全く無理のない出力である。むしろ、出力30パーセントよりも安定性は向上するほど。デイヴァイン・バスターⅡエクストリーム・バーストは原作のエクセリオン・バスターⅡフォース・バーストと同程度の威力とする。エクセリオンモードがない代わりの、なのはの限界突破方法。それが、魔導炉の出力を100%運用である。しかし、生身で100%を制御しきることはできず、最悪の場合リンカーコアの崩壊に繋がるためある意味エクセリオンモードよりも危険である。

ただし、この自己集束魔力砲は、魔力をそのまま制御して運用するよりもエネルギー効率が悪い。

（初出：無し（設定のみ：ストライクモードAWSと機能を統合する））

CQBモード

近接格闘に特化したモード。近接戦闘には不向きな杖を可能な限り短くさせ、先端には幅広の魔力刃が展開される。イルミネーターは一基のみを起動させ完全自動制御。アクティブレーダーも走査距離を近接格闘に必要な距離に限定することで精度を増しており、モジュールAWの応答性も鋭くなっている。

取り回しの容易さから、限定された狭い空間での行動にも適する。
(初出：なし(設定のみ))

エルトリウム・モード

トリアルアーツの全能力の発揮を目的に構築されたパターン。その姿はまるで大型戦闘機といえるほど。

大型の魔導推進器を二基、大気下では主翼を展開し空力による長距離巡航を実現している。操縦方式はマクロス・プラスのYF-21の脳波コントロールのような感じ。翼の形状はかなり自由に变化させることが出来、亜音速時の高機動格闘戦闘には前進翼に、低速巡航時には後退翼を、遷音速から超音速巡航時にはデルタ翼という風に変化させることが出来る。

大型であるために数人程度の規模の人員を輸送することも可能となる。

エルトリウムに変身時は、なのはの身体は出現した機械構造体に埋まってしまい、その姿を確認することは出来なくなる。操縦に関してはレijingグハートの制御システムと完全に意識を一体化させるので、身体を動かすような感覚で機体を制御することが出来る。故に非常にフレキシブルで生命的な航空機動を実現させることが出来る。機密性も高いので、設計上では宇宙での活動も可能となる。

魔導炉の出力は常時100%を実現しているため、並の次元航行艦程度の火力を誇る(流石にアルカンシエルの搭載は許可されなかった)。

（初出：なし（設定のみ：仮に出すとすれば、対ゆりかご戦の決戦兵器になるかも？））

全長：40m

全高：10m

全幅：20m（主翼展開時）

主砲：エルトリウム・キャノン（要塞破壊砲）

副砲：デイヴァイン・バスター（大型目標及び対地砲）

対空砲：デイヴァイン・シューター（CIWS）

遠距離誘導弾：アクセル・シューター（AAM）

近距離誘導弾：サイドワインダー（SAM）

<タゲボード>

無限書庫統括モジュール。無限書庫のサーバーに直結され、ネットワークの整った管理世界であれば、1024bitの暗号回線でアクセスすることが出来る。この暗号は管理局の高性能計算機でも解読に1万年かかる。

（一般的なネットワークの暗号は128bit、管理局が256bit、情報機関が512bit）

アクセスするたびに暗号がランダムに書き換えられるため、実質的に回線をリークすることは出来ない。

無限書庫のサーバーは基本的に外部から隔絶されているが、唯一管理局の情報部の機密情報保全課のサーバーとつながっており、アリシアはそこに自分のアカウントを作成し、管理局のある程度の機密情報にアクセスできるようになっている。

速読用簡易デバイス<ザントマン>と検索用簡易デバイス<ホークアイ>を統括するモジュールで、それらに並列アクセスが可能。パーソナル・コンピュータとしての機能も充実している。

<ザントマン>

速読用簡易デバイス。3冊の書物を同時に読み取ることが出来る。

<ホークアイ>

書物探索用簡易デバイス。無限書庫に多数配備されている。

聖王導光の輝路

聖王教典の中の重要な聖教の一節。

「剣で天を指し示し、その先には光があつて我らを導いた。それは聖なる道であつた。黄金の道であつた。光り輝く道であつた。闇の中で輝く光であつた。我々は彼の者を王として、王としてあがめ、聖王とお呼び奉つた。黄金と朱と翡翠。虹の光を身にたたえ。それは十萬億土の諸々の民を照らす無限の光であつた。彼の王は億劫の時を廻る（以下略）」

シュベルトクロイツ。剣十字とベルカの象徴に関して。

ベルカの象徴学的に聖王教会の象徴でもある剣十字は非常にナイーブな存在だ。基本的にベルカは3という数字が好まれ、ベルカ式魔法の展開式が三角を形作るものであることからそれはかなり妥当だと言われている。

しかし、剣十字の紋章はどうだろうか？

十字架とは二本の線を重ね合わせ、四つの頂点を持つ形を取る。これからは3という数字は浮かんでこない。さらに言えば、剣十字の紋章の中心には球体が設えており、四方に伸びる四本の柱を中程の円環が支えている。2という数字、そして円や球体。これは、どちらかといえばミッドチルダに由来する象徴ではないのかという考察

が学会にあがっていらい、この剣十字が果たして古代ベルカから継承される象徴なのかという事に物議が醸し出されている。剣十字。確かに、騎士達の発祥であり忠誠を誓う対象としてはこれ以上になり象徴だろう。しかし、それらが真実彼らが忠誠を誓うべき対象なのかどうかは、今後さらなる議論が必要となりそうだ。

Route NML 設定集(2) (前書き)

以下は本編のルートが確定する以前のアイデアです。

本編で描いたストーリーとはかなり異なるストーリーです。

Route NML 設定集(2)

別ルート考察(第一ルート)

第一ルート

- ・礼拝堂でアリシアとグレアムが出会う
アリシア↓グレアムから闇の書の主に関しての情報を入手
グレアム↓アリシアから闇の書平静のプランを提示される
アリシアとグレアムの協力体制が敷かれる

- ・地球、病院、屋上
ヴォルケンリッターとアースラチルドレンの対立、戦闘

- ・はやての下にアリシアが訪れる
はやてに説明するアリシア
はやての協力を得ることに成功する

- ・屋上を訪れたはやてとアリシア
はやての停戦勧告により停止する戦闘
はやては宣言する「闇の書の主八神はやては、アリシアちゃんの言葉を信じ、アースラに投降します」

- ・ジャミングが解除され、クロノが現場に急行する。
アースラに回収される面々。
そして、タイミングを見計らってアースラを訪れるグレアム一派

- ・グレアムの説明
アースラで今までのことを説明するグレアム。

グレアムははやてを半永久的に凍結するためのプランを実行していた。

発動間際で苦しむはやてをグレアムは低出力のエターナル・コフィンを行使することで闇の書共々コールドスリープにしX-dayを先延ばしにする。

・このことは管理局本局には秘密にされ、アースラはグレアム、ヴォルケンリッターと協力体制に移行し、アリシアの要求により忘れ去れた都、ゼファード・フェイリアへと舵を取る。

・ヴォルケンリッター達は一時的に拘束されるが、グレアムの計らによりそれらは解除され、その早々にシグナムはグレアムを殴り飛ばす。

「なんとかなるさ。これだけの人たちがはやての無事を願っている。これがかねえられないなんて嘘だ」

・ゼファード・フェイリアに到着するアースラ。アリシアはその中の一つの施設を指定し、そこが夜天の魔導書が編纂された場所だと告げる。

・アースラの奔走。しかし、結局得られたものは闇の書が正式起動して一時的に管理者権限が復活した隙を狙って正式なマスターが夜天の魔導書本来の管制プログラムと暴走した防衛プログラムを分離させれば希望はあるとのことだった。

しかし、それを行うには八神はやての精神力に欠けるしか他がなく、作戦とはいえないような作戦だった。

だったら、誰かがサポートに入れば言いとアリシアは立候補し、闇の書の構造体の内部を分析したものを示す。

管制人格が隔離された領域に踏み込み、その束縛しているプログラムを破壊出来れば確率は格段に跳ね上がる。

管制プログラムがもしも八神はやての無事を願っているのなら、必ず彼女はそれに応じてくれるはずだ。

そして、私は内部の何者にも揺るがされない自身がある。むしろ、この中では私のみが適任だと考える。

自分は作戦にはすでに用済み。ならば役立たずの私を最大限に利用する方法がこれだと説き伏せる。

最後まで反対だったリンディとクロノ、フェイトだったが、ユーノはアリシアに賛成した。「無力なのはつらいですから」

・作戦決行。発動する闇の書。はやてと手を取り合い内部へと進入するアリシア。

・シグナム達は「また後であおう」と言って光とともに闇の書に取り込まれる。

・破壊を求める闇の書。ユーノ、アルフ、クロノ、アリアの全力のバインドによって一時的に行動を停止する闇の書。

・内部

アリシア↓管制人格の枷を外す

↓はやての下へ

↓後続の暴走体からの攻撃から管制人格を守り先に行かせる

↓しかし、奮闘むなしく束縛され暴走体に取り込まれてしまう

はやて↓リインフォースを命名し、正規の管理者権限を取得。そのまま外へと逃れるが、側にアリシアがいないことに気がつく。

リインフォースはアリシアはまだ内部にいて暴走体の虜になっていると伝える。

再生される夜天の騎士団。

暴走体への最大攻撃。外装部を破壊して、その深部にあるコアを

引きずり出せばそこにアリシアがいるはずだと。

引きずり出されたアリシアは、しかし暴走体のコアと融合し元に戻れない状態。

アリシアはなのはとフェイト、ユーノ他に全力での封印魔法を自分にたたき込むように要請する。

一時的に最大出力まであげられるレイジングハート。カートリッジ6発をフルロードするフェイト、ユーノ、そしてクロノまでもがそれに協力し、アリシアと融合した暴走体に初期化封印が施される。

闇の書の正常化を確認。管制人格であるリインフォースはアリシアの中に彼女と共存を成した防衛体の存在を確認する。

「寄生と言うよりは共存って感じかな？ ウィルスみたいな感じ」
（アリシア）

ウィルスは身体の免疫力によって無害となった状態で人間と共存する。それまできわめて攻撃的だったウィルスが幾多の魔法攻撃を受けることで弱体化し、攻撃性の元となったコアを取り除かれることでアリシアの身体と共存を成し遂げた。

「まあ、随分手荒い手術だったけどね」（アリシア）
安心するメンバーだが、アリシアは「問題は無い訳じゃない」と伝える。

「防衛体の暴走したコアは消滅した。けど、防衛体そのものは私自身をコアとしてまだここにある。リインフォースはそれを認識できるから、今はまだリインフォースに防衛体が発生することはないけど、もしも私に何かあって消えることになればリインフォースはすぐさま防衛体を再生させてしまう。それは殆ど確実に暴走して、同

じ事を繰り返すんだ。 どちらかが欠けても駄目。 私たちは同時に生きて、同時に死ななければ駄目なんだ。」（アリシア）

「だけど、私は死にたくない。 リンフォースにも一人で逝かせるのは嫌だ。 だから、グレアム提督。 あなたに一つ頼みがあります」（アリシア）

「どちらにせよ、未来に課題を残したまま私たちはこの世界に存在しているわけにはいかない。 あまりにもリスクが高すぎる」（リンフォース）

「だから」（アリシア）

「シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、お前達は残る」 リンフォース

「うん、眠りにつくのは」アリシア

「私たち二人だけだ」（二人）

そのことは全員に伝えられ、アリシアはリンフォースと共に自分たちの封印を具申する。

直ちに反対するはやたとフェイト、なのは、ユーノ。

しかしアリシアは黙ってそれを聞き流す。

部屋から立ち去ったアリシア。 未だクロノやリンディに詰め寄って作戦中止を訴えるなのは、フェイト、はやて。

黙るユーノを背中に見ながらなのは達は瞳に涙を宿しながら叫び続ける。

おもむろにユーノは立ち上がり、アースラから離れようとする。 驚いたなのは達は、すぐさまユーノを追いかけて、「どうして、ユ

ーノはお姉ちゃんを止めてくれないの？」

というフェイトにユーノは「僕だって止めたいよ！　だけど、アリシアの提案以外にどうしろっていうんだ！？」

「だから、探すんだ。後どれぐらい猶予があるか分からないけど。僕は、僕なりのやり方で」

ユーノは無限書庫に向かうことを感じ取り、なのは、フェイト、はやてはそれに追従する。

ヴォルケンリッター達もはやてに続く。

ヴォルケンリッター達は「少し思うところがある」と、はやてにしばらくの暇を貰い、異世界へと旅立つ。

（行き先は明言されなかったが、彼らは古代ベルカ領王都ゼファード・フェイリアへ向かい、解決の糸口を探る）

それから三日三晩、ユーノ以外は交代で仮眠を取りアリシアのプラン以外に何とかなる方法を模索する。

途中、クロノが現れ、少しの間だけユーノ達を手伝う。「僕も、アリシアだけに背負わせたくない」

そして、x-dayはやってくる。

封印処理の目処が立ったとグレアムからの連絡を受け、落胆するユーノ達。

結局、すべてがうまくいく方法は見つからなかった。

雪原での別れ

グレアム、リーゼ姉妹によって展開される魔法陣の中心に立つアリシアとリインフォース。

それを少し離れたところで見守るクロノとリンディ。アースラでモニターするエイミイ。少し遅れて訪れたユーノ達若年チーム。

別れを済ませ、泣きじゃくる若年チーム。いよいよ儀式が举行されるという寸前、その場に強制転移してくるものがあつた。

「遅れて申し訳ありません、主はやて」

「見つけたんだ！　これがあれば、テストロッサとリインフォースは助かるかもしれねえんだ」

「突貫作業で、まだまだ不完全ですが……試してみる価値は十分にあります」

「提督方。どうか、我らにチャンスを」

『なにとぞ！』

と地に手を突いて懇願するヴォルケンリッター。その手には、一冊の白紙の魔導書と一基のデバイスが握られていた。

ゼファード・フェイリアに残されていた白紙の魔導書と高強度のストレージ・デバイス。それに唯一残っていた魔法、「インテグラル・セグメンツ」によって、アリシア、リインフォースの中にある夜天の魔導書のプログラム体を白紙の魔導書に移動させる。

シンプルであるが、その分シビアな術式制御とそのためには夜天の魔導書とその防衛体すべての魔力に匹敵するような魔力が必要となる。

魔力の問題は、全員で力を合わせれば何とかなるはずだ。「どうか、私たちに協力してください。お願いします」というシャマルの懇願に全員が答える。

グレアム、リンディ、なのは、フェイト、ヴィータ、シグナムの魔力。ユーノ、シャマル、ザフィーラ、アルフ、リーゼ姉妹の魔力制御。リンフォースの繋がりによりそれを導く道標となるはやて。

そして、発動する魔法「インテグラル・セグメンツ（Integral Segments）」すべてをあるべき姿へと還す、古代の神聖魔法。ある意味、究極の封印魔法とも言える魔法。

白紙の魔導書を通して手を握るアリシアとリンフォース。

「本当に、得難い人たちだね」

「ええ。結局、すべての諦観と絶望を打ち払ってくれる。最高のマスターとご友人達。私は、世界一幸せな魔導書でした」

「過去形じゃないでしょう？ これからも、私たちはあり続ける」
「闇の書は消滅し、そして、夜天の魔導書もまたこれを持って終わりを迎えます。私は、新たな魔導書として復活を告げる。だから、私というものはこれでお別れです」

「新しい関係に祝福を、リンフォース」

「あなたにも祝福のエールを送ります。私のセカンド・マスター」

魔法が発動し、光に包まれる二人。

そして、目覚めたそこには残骸となった夜天の魔導書と、新たな魔導書を得て幼子に戻ったリンフォース（姿形はリンフォースII）。そして、眠るアリシアだった。

インテグラル・セグメンツの発動空間。相対する二人のアリシア。

二人は話しを交わす。

次第に消えていくアリシア・アーク。

オリジナル「アリシアは泣き叫んでアリシア・アークが消えるのを防ごうとするが、アリシア・アークは

「これで、私はようやく眠ることが出来る。穏やかなまま逝くことが出来る」

「でも、でも。なんで、何であなただけが行っちゃわないとダメなの？ 本当だったら、あなたが一番助からないとダメなのに」

「アリシア。私……いや、俺はもう十分に生きた。人の何倍もの人生を歩いてきた。確かに、その多くは目を背けたくなるようなものだったけど、それでも俺は人並みの幸せを得ることが出来た。これからは、君が自分の幸せを見つける番だ。君こそ、生きなければならぬ。君は良い子だアリシア。どうか、聞き分けてくれ」

「でも、でも……私は、あなたに生きていて欲しいの！」

「結局、これもあなたの思惑通りだったの？」

「いいや、流石にこればかりは予想外だったよ。とてつもない嬉しい誤算だ」

彼女——彼の最後はそんな笑顔に包まれていた。

「おそらく俺は、こうして君に世界を与えるために存在していたのだろう。君の母が願って成就しきれなかったことを成就させるために」

「人は死ねば月に上り天よりすべてを見守る。俺も、その中の一つになって皆を見守っていけるわけだ。大丈夫、そばには居ないが夜見上げればそこにいる」

そして、アリシア「ベルディナはアリシア」オリジナルに背を向け、光の方へと歩み出す。アリシア「オリジナルは必死にそれについて行こうとするが、途中、見えない壁によって行く手を阻まれる。それがこことあちらの境界。存在するべきものでは決して立ち入れない最後の領域。月への道標。アリシア「ベルディナは後ろ手で手を振り、最後の言葉を残す。」

「Good-bye World ! Thanks for the last fortune . (さようなら世界！最後に平穩をありがとう)」

事件解決より数日後、アリシアは目覚める。

病室に泊まり込んで看病をしていたフェイトは、突然頭をなでられる感覚に驚き、アリシアの目覚めに涙する。

そして、全員が集合したところでアリシアは訪ねる。

「ここは……どこ？ あなた達はだれ？ それに、私は……なに？」

その言葉にメンバー全員は度肝を抜かれる。

「まさか、記憶喪失？」

「こんな事って……」

「え？ アリシアちゃん、忘れちゃったの？ そんな……！」

「私の仕事が甘かったせいで！」

「やめなさい、シャルさん。あなたのせいではないわ。もとより不完全のまま決行しようと決めた私の責任よ」

と、取り乱すメンバーを前にして、おびえるような表情だったアリシアは突然破顔し、笑い始める。

「Scare Tacticsだよ。みんな」
どきどき

ポカーンとするメンバーだが、すぐにそれを理解し、

「お前は！ どれだけ心配したと！」（クロノ）

「そうですよ、心臓が止まるかと思いました」（シャル）

「貴様、そこに直れ。私が直々に記憶喪失にしてやる！」（シグナム）

「酷い、酷いよ、お姉ちゃん。最悪だよ」（フェイト）

「アリシアは、冗談を言って良いときと悪いときぐらいは分かるはずだろう！？」（ユーノ）

「ふええーん。良かったよお、アリシアちゃん」（なのは）

「あ、アタシは心配なんかしなかったからな。ホントだぞ！」（ヴィータ：ツンデレ乙www）

とまあ、殴られたり抱きつかれたり泣かれたりとさんざんな目にあるアリシア。

（元々アリシアは結構悪戯好きだったはず）

（社交的で朗らかで、人見知りしない、目上の人とも仲良くできる。人から愛される少女。フェイトとはどこか反対の性格）

アリシアからの防衛体の切り離しはうまくいった。自分の中にそれは感じられないし、リインフォースとの繋がりももうない。

リインフォースは、新たに名前を付けられた魔導書「蒼天の魔導書」の管制人格となり、リインフォース・ツヴァイと名を貰った。ツヴァイは、初代の記憶と機能、情報を受け継いでいる。しかし、その感情は生まれたての赤ん坊そのものだという。

「それはそうだね、リインは新しいデバイスとして生まれ変わったんだから。私と一緒に、それまでとは違う新しい存在になったんだ」

「だけどね、悲しまないでフェイト。これは喪失じゃないんだよ。むしろ、獲得。今まで不完全だったもの同志があわさって、ようやく本当の私になったの。私が、フェイトのお姉ちゃんだって事は全然変わらないんだよ？ フェイト」

「やっと会えた。ずっと、待ってたんだよフェイト。プレシア母様の事はゴメンね、フェイト。だけど、母様はね、本当は優しい人だったんだよ。優しくすぎたから、壊れちゃったんだ。私のせいで」

「ねえ、フェイト。私がお姉ちゃんでも良い？ 私にフェイトのお姉ちゃんでいさせてくれますか？」

アリシアとツヴァイの再会

「あ、アリシアちゃん。もう、出歩いて大丈夫なのですか？」

「うん、もうすっかり元気だよ。リインも調子はどう？」

「上々です！」

「でも、良いんですか？ アリシアちゃん、皆さんに嘘付いてたです」

「……なんの、こと？」

「アリシアちゃんは、アリシアちゃんです。ベルディナはもう、いないですよ……」

「……リインには分かっちゃうんだね」

「なんとなく、ですけど。今のアリシアちゃんからは、前のアリシアちゃんを感じられないです。それまで封印されていて、抑圧されていて、表に出てこれなかったのが今のアリシアちゃんのように感じられるです」

「うん、そうだね。私は、アリシア・テストロッサ。アークじゃなくて、元々のアリシアなんだ」

「悲しいけど、きつと正しくて。アリシア……ベルディナは幸せのまま消えることが出来たと思う」

「とっても都合のいい考え方だけど。あの人が逝くときは笑顔だったんだ。だから、私も笑わないといけないんだ。誰も悲しませちゃダメなんだ」

「泣いて、良いですよ？ アリシアちゃん。リインの前では嘘はつかないで欲しいです。それに、リインもベルディナさんのために泣きたいのですよ」

「ありがとうリイン。ちょっとだけ、ごめんね」

その後のアリシア

・無限書庫での有用性を認められ、アリシアは無限書庫の司書になる。

・6歳になって地球では義務教育の開始となる。

・リンディから、さすがに学歴なしでは問題だと言われ、地球とミッド両方の通信教育を受けることとなる。結局6年後の同窓会任務までに飛び級を繰り返し、高校卒業資格まで入手してしまうということとなる。

・アリシアにあるベルディナの知識と無限書庫の情報があれば、高等教育程度の内容など遊びにもならない。

・なのは↓武装隊志願

・ユーノ↓本局付け結界師を志願（結界専門の人員はそこそこレアで、最初の階級こそなのは達より高いが、そこからの昇進は結構遅い）

・フェイト↓執務官候補

・はやて↓司令官候補

・アリシア↓無限書庫臨時司書長

「どうせ、後釜が見つければすぐ替えられる立場だから。そんなにたいしたことは無いんだよ」

なのは、ユーノ、フェイト、はやては義務教育終了まで研修期間としてアースラの預かりとなる。

ユーノはその後、結界士としてのランク試験を受け、見事結界士ランクAAAを取得する。

二年後 撃墜事件

・なのはとヴィータ、ユーノが参加した総合技術演習の帰投時に謎の集団によって襲撃を受ける。

（なのは、ヴィータ、ユーノはアースラチームの中でも特に仲が良く、時々フェイトが嫉妬してしまうほど。三人とも航空隊に所属し、そのスリーマンセルの強力さから部隊長からは一つのチームとして見なされ、事実上航空隊の切り札と見なされている節がある。近接

のエキスパートでありながらマルチロールとして行動できるヴィータ、大規模砲撃と超高性能の弾殻射撃が可能なのは、後方だけでなく前線に出ることの出来る攻勢結界師であるユーノ。チームとして理想的とも言えるその構成。）

ヴィータ・陸戦AAAランク 紅の鉄槌

なのは・空戦AAAランク 空のエース

ユーノ・結界AAAランク 大空のイージス

（チームNavilyu（チーム、ナヴィーユ））

・ユーノのデバイス

ストレージ・デバイス：ジェイド・ブロッサム

・ユーノの魔法

ラウンド・シールドⅡデュアル・レイアー・クローズ

（ラウンド・シールドⅡを二層にして強度を爆発的に高めたもの）

ラウンド・シールドⅡマルチ・レイアー・クローズ

（デュアル・レイアーをさらに多層式にすることでさらに強度を

高めたもの）

ストラグル・バインドⅡアンチカインティック・ネット

チェーン・バインドⅡアンカリング・フォール

↓チェーン・バインドを投錨の要領で相手に投げつける。

短距離高速転送魔法

↓数メートルレベルで行う転送。詠唱、発動、転送までの速度をきわめて高速にすることによって回避や移動に使用できる。座標の指定がどうしても視覚に頼るものになるため、距離が短くなる。ジェイド・ブロッサムにアクティブレーダーを搭載することで距離の底上げと座標指定の簡略化が期待できる。なのはのフラッシュ・ムーブやフェイトのブリッツ・アクションをユーノなりに実現させたもの。

ラウンド・チャージ

↓ラウンド・シールドを円錐形に展開することで攻防一体の攻撃が可能となったもの。

前腕部に円錐形のラウンド・シールドを展開し、それで相手を殴りつけるかたち。

バリア・ブレイク

↓アルフと一緒に訓練した

結界師は最初から下士官待遇で所属になる

ユーノの最初の階級：海曹補

しかし、結界師は比較的昇進が遅れるという通説のため、なのは達のような早い昇級は望めない。

海曹補から海曹長になるのに三年。それから三年後の同窓会任務でようやく准海尉

6年後 エピローグ

同窓会任務。

なのはは武装隊士官、二等空尉

フェイトは執務官

はやては指揮官候補生、一等陸尉

ユーノ 本局付け結界魔導師 准海尉

アリシア 本局付け情報士官（三等海佐） 無限書庫（正規）司

書長

クロノ 次元航行部隊提督（一等海佐相当）

リンディ 本局事務統括官（海将補：少将）

同窓会任務では、アリシアは後に予定されていた同窓会にのみ参加する。

過去話に花を咲かせる面々。アリシアは誰に知られることなく消えていった彼を思い、そして心の内に言葉を放つ「私は、笑顔でいます。元気です」

Route NML 設定集(3) (前書き)

さらに発展したルート構想です。まだまだ第一ルートを引きずっている様子が見られますが、本編の骨格がある程度見えかけている部分も散見されるようです。

また、分岐其之一ではかなり無理矢理第一ルートのストーリーに戻そうという意志が見て取れます。

Route NML 設定集(3)

別ルート考察(第二ルート)

・礼拝堂でアリシアは無力を感じる
グレアムとの対話

↓自分以外にも過去に闇の書について探索していたものがある。

今回の第三勢力はおそらくそれだろうという考察

そこからトレースした彼らの思惑。闇の書の永久凍結。しかし、それは未来を考慮に入れない不完全な手法だと言うこと。

しかし、アリシアはその黒幕がグレアムだとは気づけなかった

・クリスマス、無限書庫を引き上げたアリシアはなのは達とともに
はやての病室へ

↓はやてが闇の書の主であることを知る

なのは達が屋上で戦闘を繰り広げている内に、アリシアははやてと話を交わす。

はやてがヴォルケンリッターに蒐集を命令していないことを知り、さらに苦悩。はやてを人質にするべきかどうか。

(第二ルート分岐其之一へ)

しかし、その考察は突然出現した転送魔法によって遮られる。

その強い光を浴びて、アリシアは一時的に視界を失う。

出た先は暗闇の世界。しかし、その周囲から感じられる気配から全員が拘束され、闇の書が今まさに発動するところにあると感じるアリシア

アリシアは側に立つ少女の叫び声を聞き、その奥にいる女性の慟

哭を聞く。メルティアはそこにいて未だ苦しみ続けている。

アリシアはそれに手をさしのべ、泣き叫ぶはやてを抱きしめ、ともに闇の書に取り込まれる。

「泣かないで。私が側にいる」

・アリシアが消失したことを知り、フェイトは取り乱す。

フェイトはソニックフォームのままほとんど特攻のように闇の書に向かい、ディアボリック・エミッションの攻撃をもろに食らってしまう。

・フェイトは殆ど身体に異常はなかった。しかし、その身代わりのような形となったプレシードがフェイトの代わりに崩壊する。

「前マスターアリシアより、フェイトお嬢様を守ることを最後に命令されました。私はそれに従っただけです」

「ありがとう、ごめんねプレシード」

プレシードは機能停止。

・それでも無傷ではなかったフェイトをユーノに託し、なのはは単身闇の書と戦闘を繰り広げる

・アルフが到着し、フェイトの治療を行い、ユーノは戦線復帰

・なのはとユーノのタッグマッチ

「不謹慎だけど、なのはとこうやって一緒に戦えるのが嬉しい」

「私もだよユーノ君。私の背中ではユーノ君のものだから」

「今度は、隣だね」

「うん！」

・夢の中のアリシア

メルティアとオリヴィエ、ディレイア。戦争が無く、満ち足りた平和の中で過ごす四人。アリシアはベルディナとしてそこにあった。三人とお茶会。こうしていられるときをどれほど夢見たか。しかし、それでも俺は立ち止まるわけにはいかない。ここで立ち止まったら、死んでいったお前達に合わせる顔がないんだ。

世界は崩壊し、メルティア、オリヴィエ、ディレイアは笑顔で消えていく。

（この面会でベルディナがかつて魔剣ブリュドガランを持って翔天の王として君臨していたことを空かす）

ベルディナもアリシアの姿を取り戻し、そして崩壊した世界の中でオリジナルアリシアと面会する。

オリジナルアリシアの導きでその深淵、闇の鎖に閉じこめられた管制人格。その姿は闇に彩られたメルティアの姿だった。

止められない自分自身の暴走に涙を流す管制人格。アリシアはそれと話し、その鎖から解き放つ。

はやての下に行く管制人格。はやては管制人格にリインフォースの名前を与え、外へと出る。

その機会に応じてオリジナルアリシアはアリシアに外に出るように告げるが、アリシアはまだやることあるだろうといって外に出ようとしなない。

アリシアは暴走したプログラム体を内部で破壊することを決意し、オリジナルアリシアに協力を要請する。

闇の書の闇。そこで蠢く化け物はアリシア達を見つけ、それを取り込もうとする。

どうするのかというオリジナルアリシアに、アリシアは「制御システムを失って暴走する防衛体は新たな制御モジュールを探している。だから、私たちが二人で防衛体に方向性を与え、制御してやれば低い確率で暴走は収まるはずだ」

「どれぐらいの確率？」

「とりあえず、街角で隕石に衝突するよりは高い確率だよ」

「それだったら私たち二人で確率二倍ね。大丈夫、うまくいくよ」

「君のそう言う単純さには助けられるよオリジナル」

「貴方が悲観的過ぎただけじゃない？」

「現実的だといってくれ」

二人のアリシアはともに手を取り合い、ただ祈るように闇に身を捧げる。

・アリシア達は成功

闇の書の暴走を平静化する。オリジナルアリシアの意識体がコアとなり、アリシア・アークがその制御モジュールとして再起動。それでもなお暴走を続けている部分に関してはフェイトとなのは、ユーノ、クロノの全力の封印魔法を浴びることで正常化させる。

防衛体が存在しているということでリインフォースの当面の危険性は消滅した。しかし、アリシアのリンカーコアに寄生している状態の防衛体が今後一切暴走しないという保証はない。

（防衛体の絶大な魔力によってアリシアは一時的にSSSランク相当の魔力を有する事になるが、逆にそれさえもアリシアの生存を脅かしていくことにもなる。未だかつて大規模災害級ロストログイアクラスの魔力を有する人間など存在しなかった）

アリシアをどのような処置にするか

厳正な協議の結果、アリシアの一時的な凍結封印が決定される。
当然ながらそれに反対するアースラチルドレンと夜天の集団だが、それはアリシアの恫喝によって黙らされる。

しかし、ユーノは諦めなかった。何か方法があるはずだと無限書庫に向かう。なのはとフェイトもそれに追従する。

↓インテグラル・セグメンツの構築

シグナム達ヴォルケンリッターははやての許可を貰い、独自に動く
彼等はゼファード・フェイリアへ

↓白紙の魔導書の入手

雪の丘

アリシア凍結処理の実行。その寸前に間に合うユーノ達とシグナム達。

すべてを解決できるかもしれない。それはもの凄く確率が低いがやらせて欲しい。

「リンディ提督、グレアム提督。どうか、どうか僕達にチャンスをください」

跪くユーノ達。

それは許可され、アリシアはリインフォースと共に白紙の魔導書を持ち、インテグラル・セグメンツ（究極の封印魔法）を身に受ける。

インテグラル・セグメンツの発動空間

夜天の魔導書から白紙の魔導書に移されるリインフォースと闇の書の防衛体。

インテグラル・セグメンツは対象を最も安定した形へと強制変換する魔法で、リインフォースと防衛体は共に最も安定した形で融合を果たす。

（遠い昔、ロストロギアを完璧な形で封印するために開発されたが、それに必要な魔力があまりにも膨大で、術式も複雑すぎるため実現不可能として破棄されたもの。グラム（SS）、リンディ（S+）、クロノ（AAA+）、はやて、なのは、フェイト（共にAAA）、ユーノ（AA+）、ヴォルケンリッター（AA×2 AA×2）の魔力が会ってようやく発動できるという馬鹿ぶり）

インテグラル・セグメンツの発動空間。 相対する二人のアリシア。

二人は話しを交わす。

次第に消えていくアリシア・アーク。

オリジナル「アリシアは泣き叫んでアリシア・アークが消えるのを防ごうとするが、アリシア・アークは

「これで、私はようやく眠ることが出来る。穏やかなまま逝くことが出来る」

「でも、でも。なんで、何であなただけが行っちゃわないとダメなの？ 本当だったら、あなたが一番助からないとダメなのに」

「アリシア。私……いや、俺はもう十分に生きた。人の何倍もの人生を歩いてきた。確かに、その多くは目を背けたくなるようなものだったけど、それでも俺は人並みの幸せを得ることが出来た。これからは、君が自分の幸せを見つける番だ。君こそ、生きなければな

らない。君は良い子だアリシア。どうか、聞き分けてくれ」

「でも、でも……私は、あなたに生きていて欲しいの！」

「結局、これもあなたの思惑通りだったの？」

「いいや、流石にこればかりは予想外だったよ。とてつもない嬉しい誤算だ」

彼女——彼の最後はそんな笑顔に包まれていた。

「おそらく俺は、こうして君に世界を与えるために存在していたのだろう。君の母が願って成就しきれなかったことを成就させるために」

「人は死ねば月に上り天よりすべてを見守る。俺も、その中の一つになって皆を見守っていけるわけだ。大丈夫、そばには居ないが夜見上げればそこにいる」

そして、アリシア＝ベルディナはアリシア＝オリジナルに背を向け、光の方へと歩み出す。アリシア＝オリジナルは必死にそれについて行こうとするが、途中、見えない壁によって行く手を阻まれる。それがこことあちらの境界。存在するべきものでは決して立ち入れない最後の領域。月への道標。アリシア＝ベルディナは後ろ手で手を振り、最後の言葉を残す。

「Good-bye World ! Thanks for the last fortune . (さようなら世界 ! 最後に平穩をありがとう)」

事件解決より数日後、アリシアは目覚める。

病室に泊まり込んで看病をしていたフェイトは、突然頭をなでられる感覚に驚き、アリシアの目覚めに涙する。

そして、全員が集合したところでアリシアは訪ねる。

「ここは……どこ？ あなた達はだれ？ それに、私は……なに？」

その言葉にメンバー全員は度肝を抜かれる。

「まさか、記憶喪失？」

「こんな事って……」

「え？ アリシアちゃん、忘れちゃったの？ そんな……！」

「私の仕事が甘かったせいで！」

「やめなさい、シャルさん。あなたのせいではないわ。もとより不完全のまま決行しようと決めた私の責任よ」

と、取り乱すメンバーを前にして、おびえるような表情だったアリシアは突然破顔し、笑い始める。

「Scare Tactics^{どっき}だよ。みんな」

ポカーンとするメンバーだが、すぐにそれを理解し、

「お前は！ どれだけ心配したと！」（クロノ）

「そうですよ、心臓が止まるかと思いました」（シャル）

「貴様、そこに直れ。私が直々に記憶喪失にしてやる！」（シグナム）

「酷い、酷いよ、お姉ちゃん。最悪だよ」（フェイト）

「アリシアは、冗談を言っで良いときと悪いときぐらいは分かるはずだろう!？」（ユーノ）

「ふええーん。良かったよお、アリシアちゃん」（なのは）

「あ、アタシは心配なんかしなかったからな。ホントだぞ!」（ヴィータ）

とまあ、殴られたり抱きつかれたり泣かれたりとさんざんな目にあるアリシア。

（元々アリシアは結構悪戯好きだったはず）

（社交的で朗らかで、人見知りしない、目上の人とも仲良くできる人から愛される少女。フェイトとはどこか反対の性格）

アリシアからの防衛体の切り離しはうまくいった。自分の中にそれは感じられないし、リインフォースとの繋がりももうない。

リインフォースは、新たに名前を付けられた魔導書「蒼天の魔導書」の管制人格となり、リインフォース・ツヴァイと名を貰った。ツヴァイは、初代の記憶と機能、情報を受け継いでいる。しかし、その感情は生まれたての赤ん坊そのものだという。

「それはそうだね、リインは新しいデバイスとして生まれ変わったんだから。私と一緒に、それまでとは違う新しい存在になったんだ」

「だけどね、悲しまないでフェイト。これは喪失じゃないんだよ。むしろ、獲得。今まで不完全だったもの同志があわさって、ようやく本当の私になったの。私が、フェイトのお姉ちゃんだって事は全然変わらないんだよ？ フェイト」

「やっと会えた。ずっと、待ってたんだよフェイト。プレシア母様

の事はゴメンね、フェイト。だけど、母様はね、本当は優しい人だったんだよ。優しすぎたから、壊れちゃったんだ。私のせいで」

「ねえ、フェイト。私がお姉ちゃんでも良い？ 私にフェイトのお姉ちゃんていさせてくれますか？」

アリシアとツヴァイの再会

「あ、アリシアちゃん。もう、出歩いてても大丈夫なのですか？」

「うん、もうすっかり元気だよ。ラインも調子はどう？」

「上々ですー！」

「でも、良いんですか？ アリシアちゃん、皆さんに嘘付いてたです」

「……なんの、こと？」

「アリシアちゃんは、アリシアちゃんです。ベルディナはもう、いないですよ……」

「……ラインには分かっちゃうんだね」

「なんとなく、ですけど。今のアリシアちゃんからは、前のアリシ

アちゃんを感じられないです。それまで封印されていて、抑圧されていて、表に出てこれなかったのが今のアリシアちゃんのように感じられるです」

「うん、そうだね。私は、アリシア・テストロッサ。アークじゃないくて、元々のアリシアなんだ」

「悲しいけど、きっと正しくて。アリシア……ベルディナは幸せのまま消えることが出来たと思う」

「とっても都合のいい考え方だけど。あの人が逝くときは笑顔だったんだ。だから、私も笑わないといけないんだ。誰も悲しませちゃダメなんだ」

「泣いて、良いですよ？ アリシアちゃん。ラインの前では嘘はつかないで欲しいです。それに、ラインもベルディナさんのために泣きたいですよ」

「ありがとうライン。ちょっとだけ、ごめんね」

上記よりさらに分岐

<第二ルート分岐其之一>

そしてアリシアははやてをつれて屋上へ。この無意味な戦いを止めさせることを決め、はやてはアリシアと共に停戦を勧告する。

しかし、突然現れた仮面の男によってアースラチルドレン、ヴォルケンリッターは捕縛されてしまい、アリシアとはやては彼等に誘拐されてしまう。

主が誘拐されて戦う意味を見失ったヴォルケンリッター。
ヴィータの目くらまし、シャマルの攪乱によって戦線離脱するヴォルケンリッター。

はやてとアリシアが連れてこられたところは、ミッドチルダの一角。そこにいる仮面の男。
そして出現するグレラム。

グレラムはアリシアとはやてに今まで自分が行おうとしていた事を告げる。

結局、黒幕は貴方だったのかとはき出すアリシア。
グレラムが自分を支えてくれていたのは結局闇の書を凍結するためだったのかと絶望するはやて。

しかし、グレラムは自分でも分からなくなってしまったと告白する。

何が正しいのか、何が間違っているのか。確かに自分が闇の書を永久凍結しようとしたことは正しいと今でも言える。しかし、そのために少ない命を犠牲にする事が果たして正しいことなのか

「正悪は普遍的なものではなく、それは時代と人の移り変わりによって容易に変わっていく。絶対的なものなどない。しかし、絶対的に正しいことなど絶対に存在しない」はやて

それを言っただけは、本の受け売りですけどと頬を染める。

「聖王陛下でさえ時には間違いを犯す」アリシア

↓今では教義に反すると言って言葉狩りがされた古代ベルカのことわざ。

「一緒に考えましょう。貴方がこうして話してくれたと言うことはまだ希望を捨てていないと言うことでしょう？」

そして、メンバーは一路ゼファード・フェイリアへ。

ヴォルケンリッターは八神家を離れ、近隣の次元世界を行ったり来たり。

その間にあのかのときの転送の残滓を追求め、ようやく狭間の認知外世界、ゼファード・フェイリアへと至る。

そして、ヴォルケンリッターを探索中だったアースラムもヴォルケンリッターがその世界へと向かっていることを観測し、その世界へと舵を取る。

そして、闇の書の平静のための何回目かの実験を行うアリシアとグレアム、はやて。

その実験中に割り込むシグナム達。

「主はやてをはなせ！」

グレアムの背後から斬りつけるシグナム

「ギル！」

というアリシアを横つ面に吹き飛ばすヴィータ。
はやてを確保しようとするシャマル。

リーゼアリア、リーゼロッテを取り押さえるザフィーラ。

しかし、それらははやての絶叫で凍結される。

発動しかけた闇の書に飲み込まれようとするはやて。

「拙い！」

アリシアは素早く判断し、証明実験も終えていない方法を持って
闇の書の発動に割り込み、はやての手を取る。

共に闇に飲まれていく二人。

グレアムは大量の血を流しながらデュランダルを構え、完全凍結
の手前まで出力を調整されたエターナル・コフィンで闇の書の動き
を一時的に遅延させ、そして意識を失う。

既にアースラの包囲にあったゼファード・フェイリア。

ヴォルケンリッター、グレアム一派はそのまま無条件にアースラ
の捕縛にあう。

グレアムは意識不明の重体で、老体である事と最後の魔法行使によつてほとんど峠状態。

リーゼ姉妹も、緊急処置で力を失い猫の姿で昏睡を続ける。

グレアムは最後の時にシグナムヘデュランダルを託しており、それがクロノへと送り届けられる。

そこで判明したグレアムの計画とアリシアとの計画の概要。

しかし、そこに記されているのは計画のアウトラインのみで、具体的にアリシアが今何をしているのか。何の思惑で闇の書の内部に侵入したのかは不明となる。

アリシア救出作戦が採択される。

当然ながらシグナム達もそれに協力することとなる。

プラン1

・エターナル・コフィンを完璧な形で闇の書に照射し、闇の書の凍結をする案。

↓内部のアリシアとはやてが無事かどうかは分からないが、少なくとも数年間の猶予を確保することは出来る。

↓Route "ETCF"

プラン2

・何とかして内部をスキャンし、安全に内部に侵入できる方法を模索する。

闇の書の闇の内部は一つの宇宙空間のようになり、その内部は遠大で深層。内部と外部の時間でさえ同じかどうか分からない。

それを承知で内部に潜入するのは達。クロノを筆頭としたアースラチルドレンによる内部調査と救出。

ダンジョンRPG風

(Route”TCON”)

Route NML 設定集(4) (前書き)

さらにルート構想です。ひな形はほとんどできあがっている状態ですが、最後の落ちの部分はまだまだ第一ルートを引きずっているようです。

Route NML 設定集(4)

別ルート考察(決定一步手前)

遷章 第一話 Grave

・礼拝堂でアリシアは無力を感じる

グレアムとの対話

↓自分以外にも過去に闇の書について探索していたものがある。

今回の第三勢力はおそらくそれだろうという考察

そこからトレースした彼らの思惑。闇の書の永久凍結。しかし、それは未来を考慮に入れない不完全な手法だと言うこと。

(アリシアは自分自身が考えているベルディナの記憶から導かれた考えを告げる。ゼファード・フェイリア、そこに解決のための手がかりがあるはずだ)

しかし、アリシアはその黒幕がグレアムだとは気づけなかった(アリシアはこの計画を考えた第1候補をリンディだと思っていた)(グレアムはアリシアの案の裏をとるため、独自にゼファード・フェイリアの位置を探り、アリシアの言葉がそこまで奇天烈なことではないとする。アリシアの案には自分たちが捨てた希望が存在するかもしれない。それにグレアムは悩む)

|||||

遷章 第二話 Reverse

Wheel of Fortune || the reverse position

・クリスマス、無限書庫を引き上げたアリシアはなのは達とともに
はやての病室へ

↓はやてが闇の書の主であることを知る

なのは達が屋上で戦闘を繰り広げている内に、アリシアははや
てと話を交わす。

はやてがヴォルケンリッターに蒐集を命令していないことを知
り、さらに苦悩。はやてを人質にするべきかどうか。

（はやてを人質にして、ヴォルケンリッター達を強制的に行動不能
にして回収。その後、然るべき席を設けてアースラのリンディによ
つて闇の書に関する誤解を解く。その上で共に事件を解決していく
方法も考えられる）

|||||

はやてへのサプライズプレゼントが終わり、アリシアはアリサとす
ずかとともに病院を後にしようとする。

ヴォルケンリッターはアリシアが最初の敵将だと言うことを知らず、
ほとんど魔力反応がない（なのは、ユーノ、フェイトの魔力に隠れ
てしまっていた）アリシアを見過ごすこととなる。

しかし、アリシアはアリサとすずかに「ごめん、ちょっと忘れ物を
したみたい」といって病室に戻る。アリシアは病室にわざとサンゲ
ラスを忘れており、それを取りに戻る。

|||||

屋上での戦闘シーン

ヴィータに手をさしのべるユーノ。涙を流しながらそれを拒み、

ユーノに攻撃を加えるヴィータ。

出力が向上し、デバイスを手にしたユーノはそれを防ぎ、炎上する中から無傷で姿を示す。

「何でだよ、何でお前はあたしの前に立ちふさがんだよ。イージス」

「僕は、君を、君たちを止めたいんだ」

「うん。そのために私たちは、戦うって決めたんだ」

「ヴィータちゃんやシグナムさん、シャマルさんにザフィーラさんの助けになりたい」

「そのためなら悪魔と言われても僕達は止まらない」

（ユーノの隣りに歩み寄りレイジングハートを構え微笑むのは。その向こう隣でバルディッシュとプレシードを掲げて微笑むフェイト）

「戦おう？ ヴィータちゃん。正々堂々真っ正面から。それで私たちが勝ったら話を聞かせてね」

「お前ら、全員悪魔だ！」

戦闘開始

|||||

シグナムVSフェイト

「薄い装甲をさらに薄くしたか」

「その分早く動ける。強いあなたに勝つにはこうするしかなかったから。それに、私は一人じゃない。お姉ちゃんも一緒に戦ってくれる」

フェイトはプレシードを取り出し、セツトアップさせる。フェイトに追加される武装。自動防御を主体とした大型手甲型デバイス。

『速度を重視するあまり防御力を犠牲にした馬鹿な妹へ。それでも使って生存率を高めておき給え』

ユーノVSシャマル

通信妨害をするシャマルを何とかするためにユーノが向かうが、そこにザフィーラが介入。

↓ユーノVSザフィーラへ

ユーノはそこでは初めてデバイスを起動させる。ジェイド・ブロッサム。出力が向上したがその分不安定になったリンカーコアからの出力を安定化させるためのモジュール。安定化電源装置のようなもので、従来よりも若干即応性が低くなる。しかし、その分今まで以上に大規模な魔力を投入することが出来、結果的に術式の構成密度が若干劣るにせよ、全体的な強度や硬度は上昇している。

なのはVSヴィータ

シャマルを捕獲しようとするユーノを追うヴィータをなのはが押さえる形。

途中まではなのは、ユーノVSヴィータのようになっていたが、ザフィーラの介入によりなのはVSヴィータが確定する。

|||||

しかし、たとえ緊急事態でも子供達にはせめて自分で得られる未来を考え、アリシアははやてを伴い屋上へ。

はやてを負ぶって屋上に現れるアリシア。

ヴィータはそれを人質と判断し、一瞬離れたアリシアに打ちかかろうとする。なのは慌ててそれに割り込もうとしてヴィータの槌に吹き飛ばされ、アリシアは攻撃に晒される。しかし、アリシアはその攻撃を見切り、ミリ単位で身体を反らせて前髪が数本散る程度で回避する。

それが一合、二合と続き、制止を呼びかけるはやてさえも無視するが、

アリシアが柔術の要領でヴィータを投げ飛ばして強制的に距離を離す。

アリシアとヴィータの間になのはが入り、戦域はようやく膠着状態へ。

アリシアとはやてを中心にその周りを固めるようになるのは、フェイト、ユーノが立ち、はやてはその防壁から一步外に出て問いかける。

「これは、どういう言うことや？ 何で、みんながなのはちゃんとフェイトちゃん、ユーノ君と戦ってるんや？」

フェイトはアリシアを見るが、アリシアは「はやての好きにさせてやれ」と首を降る。

シグナムは武器を下ろし、はやてに傳く。
ヴィータも同様。

なのはそれに安心し、レイジングハートの切っ先を下ろし、フツと力を抜いてアリシアの方へと向き直る。

「気を緩めるな、なのは」と声をかけようとしたアリシアだが、それよりも早くヴィータは加速し、なのはを吹き飛ばし、顔面を掴み取る。

「ごめん。だけど、あたしはもう迷わない」

といってヴィータはなのはの胸に腕を沈めリンカーコアを掴み取る。闇の書が召還され、なのはは蒐集される。

しかし、後十頁ほど足りない。ヴィータはその不足分を自分自身のリンカーコアで補填するために、自身を晒す。

|||||

はやては停戦勧告を行おうとしていたが、その瞬間手が緩んだなのはをヴィータが蒐集してしまう。

ヴィータは闇の書呼び出し、その魔力を蒐集させる。しかし、後一步足りない。ヴィータは瞬間的に判断を下し、自らのリンカーコアを闇の書に蒐集させることで闇の書を完成へと導く。

アリシアとなのはに気をとられたフェイトもまた、シグナムの攻撃を受けて撃墜され行動不能に。

地面に落ちるなのは。寸前で助け出すユーノ。

なのははぎりぎり意識を保っている状態で、ユーノは荒療法と分かっているながらもなのはのリンカーコアに自分の魔力を流し込む。

「元気になって、はやて」

光の粒子となって消滅するヴィータ。

「嫌や、こんなの嫌や!」

残されたヴィータの衣服を手に取り慟哭するはやて。

結局、自分のせいだ。自分がこんなだからヴィータやシグナム、シャマル、ザフィーラに迷惑をかけていた。そして、自分はこんな事も知らずにただのうのうと、死ぬとか生きるとかそんな事ばかり考えていた。

「全部私のせいや。私が、私がああ！！！」

闇の書に最後の頁が刻まれた。

遷章 第四話 V i b r a t i o n

はやての周りにわき上がる闇。

闇の書の出現と同時に力を失う残りのヴォルケンリッター。

アリシアはそれに巻き込まれる形で闇の書に吸収されてしまう。

・ユーノは魔力を蒐集されて意識をもろろつとさせるのはを抱えて離脱しようとする。

・闇の書から放たれるディアボリック・エミッション。

ユーノ：プロテクション・ハイ
フェイト：オートディフェンサー・パスワード（カートリッジ一発消費プレシードによる）

三人はからがらそれから逃れ、闇の書は続いてスターライト・ブレイカーを放とうとする。

・ユーノは援護に現れたアルフになのはを預け、フェイトともに二手に分かれる。

・アリサとすずか。ユーノとフェイトは二人の保護に入り、ユーノは全力の防御魔法を展開する。【ラウンド・シールドⅡマルチレイヤー・クローズ：計三層のラウンド・シールドの同時展開。アースラチームでは最高の強度を誇る防御魔法】

「フェイト、合わせられる？」

「大丈夫だよユーノ。だって、私達、弟妹でしょう？」

「うん、そうだね」

・ユーノはアリサとすずかを転送する合間、フェイトに闇の書を押さえておくように要請する。

・闇の書に対してフェイトは「お姉ちゃんを、返せえええ！！！」
といって突撃するが、フェイトは闇の書に捕縛され中に取り込まれてしまう。

「お前の姉もまた私の中で永遠の夢を見ている。お前もともに夢に沈むといい」

・フェイトが消失し、転送作業中のユーノ（封鎖結界内で外へ転送するのは非常に難しく時間がかかる）に闇の書が襲いかかる。

・しかし、それをなのはが肩で息をしながら何とか助ける。

・なのはは蒐集され、魔力が枯渇している状態だったが、一時的にレイジングハートの魔導炉の出力をあげて、半ば無理矢理に魔力供給を受けている状態。（はっきり言って長続きするものではなく、身体にかかる負担も大きい）

・アリサとすずかは結界の外へと転送され、アルフにそのサポートが依頼される。

・ユーノは大規模防御魔法の長時間の使用と、複雑な転送を行ったせいでリンカーコアに激痛が走る。

なのはとユーノ。ともに半ば満身創痍でありながら二人は戦闘続行を決意する。

「レイジングハート、モジュールAW「Artificial Wing」起動」

《あまりお勧めできません。マスターの現在の状態では加速と制御に耐えられないかもしれません。それでもやりますか？》

「みんな頑張ってる。だから、私もちよつとだけ無茶をする！」

《全く、扱いづらいマスターですね。了解しました。追加拡張モジュールAW起動、高速機動術式「Super Accelerate Wing」ロード。システム解放》

＊レイジングハートの先端の装甲がオープンし、三対計六枚の桃色の翼が展開される。水平主翼、斜めに二対の副翼。硬質な防御力と大規模な火力を保持しながら、その重量を無理矢理動かせるための超高加速モジュールであることを説明。

<画面転換：海鳴に急行する二人の仮面の男>

グレアムとの協議のために一時的に監視が甘くなっていた。そし

て、今後の身の振り方を決定したとたんに海鳴で起こっている戦闘に気がつく。

急いで転送し、現場に急行するも、そこにあるのは闇の書に取り込まれた八神はやての姿だった。

（二人はデュランダルを持っていない）

闇の書からの攻撃に晒される満身創痍気味のなのはとユーノを守り、リーゼ姉妹はユーノとなのはの直衛に回る。

出現する仮面の男、

「遅かったか」

仮面の男はグレアムの意志を受け、はやてと同様停戦を勧告し、アリシアの案にのるつもりだった。

仮面の男を確認したクロノは直ちに現場に急行しようとするが、アースラに転移してきたグレアムによってそれが止められ、グレアムの命令により、仮面の男は変身を解く。

グレアムはリーゼ姉妹を現場に残し、アースラに投降する。

||||||||||||||||||||

遷章 第五話 Justice

クロノとグレアムの会話。

（その間はなのは達は戦闘を続けている）

（バックにはなのは達をモニターした映像が映し出される）

計画路線を変更したのはアリシアの言葉。彼女に希望を託すつもりだったが、既に遅く、彼女は闇の書に取り込まれた。遅すぎたのだとうなだれるグレアム。

希望は残されているというクロノにデュランダルが託される。

「アリシアは解決の方法を知っているようだった。古代ベルカの王都ゼファード・フェイリアならその解決策が残されているはずだね。すべてを犠牲にしない方法があるのなら、私はそれに希望を託そうと思った。しかし、遅すぎた」

闇の書の暴走が始まった。デュランダルによる永久凍結のタイミングは失われてしまった。

「それに、欠点もあつた。アリシアに指摘されずとも分かっていたことだ。永久凍結と言っても完全な封印ではなく、やがてその封印は解かれる。いかに守ろうとも、隠し続けている以上後数十年は持たない。私の命では、永遠など不可能だった」

「それでも、僅かな時間でも闇の書の活動が封じられるなら、提督は正しい。ですが、闇の書の主は暴走が始まるそのときまで凍結されるような犯罪者ではない」クロノ

「そうだね、その通りだ。クロノ、君は正しい。しかし、その正義のために君は地球に住む60億の人類が危険にさらされることを容認するのかね」

「そうさせないのが、僕の仕事です」

「たとえば、確たる方法が無くともかね？」

「僕は……管理局の執務官なんです」

「クロノ、君は正しい方法を選びたまえ。私のような間違いは犯すな」

「グレアム提督、あなたは何も間違っていない。ただ、正しくなかった。それだけです」

リンディは出撃するクロノに、アルカンシエルのトリガーをオーブンし照準を海鳴に向けたことを伝える。

後は、キーを差し込みひねるだけでアルカンシエルは発射され、海鳴を含む周囲百数十キロの範囲の都市、そしてそこに住む100万人相当の人命が失われることとなる。60億の犠牲が、これによって100万人に減らされた。

あと、どこまで犠牲を減らすことが出来るか。

これを使わなくてもすむようにとリンディはクロノに言い残す。

||||||||||||||||

遷章 第六話 DownForce

現場。ユーノとなのはのタッグをリーゼ姉妹がサポートする形で戦闘は続く。

グラムは一時的に拘束が解除され、リンディの側で指揮のサポートを行う。

闇の書は強い。アリシア／ベルディナを蒐集したために、闇の書は彼の戦術や技術を身につけてしまっている。SSSランク相当の魔力と大規模な破壊魔法に強固な防御力。そして、ベルディナの戦闘技術によってそれらがパーフェクトに統合され、ユーノとなのは、リーゼ姉妹の波状攻撃に晒されてもなお勢いは全く衰えない。

「闇の書さんの動き、私、見たことあるよ」なのは
「うん、あれは、アリシアの動きだ」ユーノ

ベルディナは近接格闘のエキスパートで、剣を持って戦うことも出来る。

ありとあらゆる戦場でありとあらゆる武具や兵器の扱いにたけ、それがSSS級の魔力によって後押しされている。

おそらく、平均Aランクの武装局員一個中隊（数百人相当の戦力）を投入したとしても全滅を覚悟しなければならぬ程のレベルだろう。

大規模破壊に中距離射撃戦闘、近距離格闘にユーノを凌駕するほどの鉄壁とフェイトに勝るほどの高速機動力。勝てる要素が一つもない。

（原作では、闇の書は大規模な魔力にものを言わせ、鉄壁と攻撃力を用いただけだった。しかし、本作ではベルディナのリンカーコアを蒐集しているため、そこに戦術と戦闘経験が上乘せされている）

・夢の中のフェイト

何度も願った家族とのふれあい。

アリシアとリニス、プレシア。幸せな家族がそこにあった。

そして、雨の木の下でアリシアとフェイトの語らい。

（それとも、原作アニメの夢を見せて、「ここにはお姉ちゃんがない」といわせてみるか？

・幸せな夢

・なのはがいて、ユーノがいて、クロノ、エイミィ、リンディがいる
・そこにアリシアが居ないだけですべてが満たされ、そしてスリルに満ちあふれる。自分は凛々しい少女で、様々な人々のために執務官として貢献している

いや、それではオリジナルノアリシアとベルディナノアリシアの対比が描けないか……）

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

・深緑の中に建てられた時の庭園
・ミッドチルダ南部、アルトセイムの森の中に立てられたその施設の中央。ダブルベッドの子供部屋に眠る二人の少女。

・フェイトは飛び起きるように目を覚ます

・周りを見回して「ここは……庭園？」

・となりで目を覚ますオリジナルノアリシア

「フェイト、おはよ〜」

・目覚めた瞬間にとなりの子犬アルフの尻尾を掴んでベッドから飛

び降りるアリシア。

「えっと、お姉ちゃん？」

「んゝ、そだよ？」

ぶんぶんアルフを振り回して遊ぶアリシア。

そして、現れるリニス。

「アリシア！ アルフをいじめてはいけないとあれほど言っておいたでしょう！！ どうして貴方はそれが守れないのです！？」

リニスはプンプン怒るが、アリシアは

「いじめてないもん、可愛がつてるんだもん」

と答え、アルフを頭の上へのつけようとする。

「助けてフェイト」

とアルフはアリシアではなく、フェイトの頭の上に乗ってぶるぶる震える。

朝食の席に着くアリシアは柱の影に隠れるフェイトを引っ張り、無理矢理プレシアの前に持ってくる。

「まあ、フェイト。どうしたの？ アリシアにいじめられでもしたのかしら？」

「むゝ、かあさま酷い。いじめないもん」

「それにしてもアリシア。今朝は随分はしゃいでいますね。なにか良いことが会ったのですか？」

というリニスにアリシアは。

「んゝ？ 別に何も無いよ？ 私は、今を楽しんでるだけ。それほど長くは続かないから」

「それはつまり、飽きっぽいと言うことですか」

「そうともゆゝ」

「さで、今日は街に行きましょう。フェイトの合格のお祝いに新しい靴を買うのだったかしら」

「フェイトばかりずるい。私も新しい服が欲しい！」

とだだをこねるアリシアだが、リニスがメツと叱り、

「それは、アリシアが合格するまでお預けです。アリシアはもっと勉強に励むべきです」

「勉強嫌いー。ねえ、フェイト、今度私と入れ替わって代わりに受けてきてよ」

「アリシア、本当にそんなことをしたら、半年間はおやつ抜きね」とプレシア。

「まったくアリシアは、どうしてそう樂をしようと思えるのですか！？ もっとフェイトを見習いなさい」

「さで、今日は街に行きましょう。フェイトの合格のお祝いに新しい靴を買うのだったかしら」

・夢の中のアリシア

かつて、幸せの象徴だったベルカ王宮の中庭。

メルティアとオリヴィエ、デイレシア。戦争が無く、満ち足りた平和の中で過ごす四人。アリシアはベルディナとしてそこにあった。三人とお茶会。こうしていられるときをどれほど夢見たか。

・夢の中のフェイト

何度も願った家族とのふれあい。

アリシアとリニス、プレシア。幸せな家族がそこにあった。

そして、雨の木の下でアリシアとフェイトの語らい。

ここは現実ではない。夢か幻か。

穏やかな日常が流れていく。

そして、庭園の庭で蝶を追い掛けて遊ぶアリシアに、読書をしながらそれを見守るフェイト。

降り始める雨。雨宿りをする二人。

静かな時間。フェイトは口を開く。

「これは、夢なんだよね」

「フェイトが夢だと思えば、そうだね」

夢と現実の境とは実はとても曖昧。どちらが夢でどちらが現実か、自分がどのように認識するかですべてが決定する。

今ここでもしもフェイトがこれを現実だと受け入れればこれは現実になるし、夢だと思えば夢になる。醒めない夢は現実。現実は醒めてしまえば夢となる。フェイトはどちらを選ぶのかな？

・夢の中のアリシア

「やっぱり、あなたは満足できないのね」

「現実と虚構の差を理解するのは魔力を扱う人間の基本だからな」

「もつとも、300年前の俺なら、たとえ夢と分かっているとしてもしがみついていただろうが……俺も少しは変わったってことかな？」

「永遠なんてないよ、ベル。どんなに変わらないって思っても、た

だ時を重ねるだけで変わっていくものだと思は思う。変わらないのは、私がベルのことが好きだってことだけ」(オリヴィエ)

しかし、それでも俺は立ち止まるわけにはいかない。ここで立ち止まったら、死んでいったお前達に合わせる顔がないんだ。

世界は崩壊し、メルティア、オリヴィエ、ディレイアは笑顔で消えていく。

(アリシアに魔剣ブリュドガランを託して消えるメルティア、オリヴィエ、ディレイア)

(神秘によって編まれた武具は、真摯な呼び声によって姿を示す。時を超え、空間を超えて受け継がれていく。この夜天の魔導書のよう(ブリュドガラン)にね)

(この子は言葉を話さないけど、あなたとともにありたいって言っているよ)

「まったく、お前は潔いくせに一度悩むとぐだぐだするよな。見てるこっちがいつもやきもきして多聞だぜ」ディレイア

「そのせいで、私の求愛を何時までも受け入れてくれなかったもんね」メルティア

「いや、あれはだなあ」ベルディナ

「俺のためってのは無しだぜ。メルは俺じゃなくてお前を選んだんだ。それで俺がどうこう言う資格はねえよ」ディレイア

「そう言うんだったら、私だってベルが好きだったのに、最後までベルは気付いてくれなかったよね？」オリヴィエ

「お前にはシュトウラの霸王がいただろう」ベルディナ

「それとこれとは話が別。私はクラウスのが好き、大好きだった、愛してるって言っても良かったわ。だけど、それと同じくらいベルが好きだったのよ。ディレイアもメル愛してる。会ったことが無いけど冥府の炎王イクスヴェリアだってきつと私は好きになる。

一つだけじゃない、私は全部欲しかった。全員と添い遂げたいと本

気で思った。ただそれだけのことよ」オリヴィエ

「男女構わずかよ。俺達の主は全く節操がねえな。まあ、王家はいくらでも重婚できたわけだし、別にかまわねえがな。聖王陛下」デイレシア

「王の愛は広く深くよ。そうでもない」と国を愛することなんて出来ない。それが私のやり方」オリヴィエ

「これが私たちが貴方に託す最後の希望。これであの子を、あの子達を掬い上げてあげて」

「これは、ブリュドガラン？」

「そう。最後のあるとき、私の中に残ったこれはずっと貴方を待ち望んでいた。運命かもね、貴方がこうしてここにいるのは」

「運命か。そのFATEがDoomではなくFortuneであることを祈るよ」ベルディナ

「それを決めるのは貴方。さあ、行ってらっしゃい。私が愛した最初で最後の人」メルティア

ベルディナが浮かべる涙。

「泣き虫なところも相変わらずだな。じゃあ、元気でな。幸運を祈る」デイレシア

「さよなら、ベル」オリヴィエ

ベルディナはアリシアの姿を取り戻し、ブリュドガランを一閃させ偽りの空間をなぎ払う。

そして、その側で、闇の鎖に閉じこめられた管制人格と相對する。その姿は闇に彩られたメルティアの姿だった。

止められない自分自身の暴走に涙を流す管制人格。アリシアはそれと話し、ブリュドガランをふるってその鎖から解き放つ。

アリシアは管制人格にブリュドガランを託す。

「君の主なら、この剣を使ってシステムから君だけを切り離すことが出来るだろう。君の主がこの剣を扱うなら、ベルディナもメルティアも許してくれると思う」

はやての下に行く管制人格。はやては管制人格にリインフォースの名前を与え、管理者権限を奪取すると共にシステムの暴走体の切り離しを行う。

・夢の中のフェイト

アリシアからバルディッシュとプレシードを手渡される。

それを背にフェイトは外へと向かう。

フェイトが立ち去り、オリジナル／アリシアの元にベルディナ／アリシアが出現する。

「お疲れ様、私。そっちはどうだった？」オリジナル／アリシア
「何とかなったと思っていたいね」

「……………」

「じゃあ、あなたもそろそろ出た方が良いわ。みんなと合流しないと」オリジナル／アリシア

「んー、もう少し付き合ってくれないか？ 闇の書の暴走体はパージされたみたいだけど、このまま放っておくと、二人が外に出る前

にまた暴走体に引きずられるかもしれないんだ」

「防波堤になるって言うの？ それじゃあ、あなたが出るタイミングがほとんど無くなってしまっわ」

「まあ、そのあたりは何とか上手くやるよ」

アリシアは暴走したプログラム体を内部で破壊することを決意し、オリジナルアリシアに協力を要請する。

闇の書の闇。そこで蠢く化け物はアリシア達を見つけ、それを取り込もうとする。

どうするのかというオリジナルアリシアに、アリシアは「制御システムを失って暴走する防衛体は新たな制御モジュールを探している。だから、私たちが二人で防衛体に方向性を与え、制御してやれば低い確率で暴走は収まるはずだ」

「どれぐらいの確率？」

「宝くじに当たるよりは高いよ、さすがに」

「それだったら私たち二人で確率二倍ね。大丈夫、うまくいくよ」

「君のそう言う単純さには助けられるよアリシア」

「貴方が悲観的過ぎなだけじゃない、アリシア？」

「現実的だといってくれ」

二人のアリシアはともに手を取り合い、ただ祈るように闇に身を捧げる。

闇の書から復帰したはやてはリインフォースをセットアップさせ、それと共に携えた翔天の剣ブリュドガランと熾天の盾ゼルドガリスを持つ。夜天の魔導書、翔天の剣、熾天の盾。ベルカ三大従王遺物がそろった。

まだ内部にアリシアが居る。どうするべきかと考えあぐねる面々だが、そこに二人のアリシアから通信が入る。

「私たちはこれから闇の書の防衛体を制御下に置く」

「そのために暴走体を大人しくして欲しいの。みんなが持てる限りの力で、全身全霊をかけて暴走体を攻撃して」

「コアを取り出せば後は私たちが押さえ込む」

「お願い、あまり時間がないの」

・内部、二人のアリシア

無限転成機能はリインフォースが外に出たと同時にオミットされた。けど、このまま暴走体を壊したとしても、リインフォース本体がもう一度暴走体を生み出す確率はほぼ確実。

だったら、やはり暴走体を壊さずに平静化させるしかなさそうだ。

大容量の白紙の魔導書が一冊あれば、何とか本体のプログラムを改ざんしつつインストールすることが出来るけど。無いものは仕方がないか。

だったら、私達の身体を魔導書の代わりにすればいい。

闇の書フルボッコ作戦

・なのは、ユーノ、ヴィータのタッグ

「行くぞ、高町なのは、イージス！」

「うん、任せて！」

「いい加減僕のこととは名前で呼んでくれないかな」

「そんなこまけえことは良いんだよ！」

ギガント・シユラーク

「レイジングハート、魔導炉全力運転！」

《出力向上五〇パーセント、安定出力値マーク》

ディヴァイン・バスターⅡフルパワー

チエーン・バインドⅡエクストリーム・アンカー（チエーンを射出し、それらを物体加速陣を多層展開することで音速に近い速度まで加速させる）

・シグナム、フェイト

シュツルム・ファルケン

ジェット・ザンバー

・はやて

「打ち払え闇を、轟け炎雷。天を翔よブリュドガラン。勇猛なる不死鳥のごとく」

「来たれ光の鉄槌、エクスカリバー！」

ブリュドガランによる光の斬撃魔法<エクスカリバー>

・暴走体からの大規模砲撃

「任せといて。なのはちゃんとフェイとちゃんはチャージを続けてればええ。私がみんなを守る」

↓熾天の盾を掲げる

「誰も傷つけさせへん。ゼルドガリス！ 私に盾を」
殆ど飽和攻撃に近い砲撃をそれですべて守りきる。

・クロノ

エターナル・コフィン

・なのはとフェイト、はやての三位一体攻撃

スターライト・ブレイカー

プラズマ・ザンバー・ブレイカー

ラグナロク・ブレイカー

（はやてはブリュドガランを鞘に収め、剣十字の杖を召還する）

・そして、シャマルがコアを掴み取り表出させる

・表出したコアは瞬間的に再生を繰り返しそうになるが、その姿は様々に変質し、最終的にその姿は幼いアリシアの姿になる。

しかし、その腕、身体から触手が蠢くように展開するが、アリシアはフェイトとなのはに全力の封印魔法を当てさせる。

気を失うアリシアとはやて。二人はアースラに收容される。

・アリシア達は成功

闇の書の暴走を平静化する。オリジナルアリシアの意識体がコアとなり、アリシア・アークがその制御モジュールとして再起動。それでもなお暴走を続けている部分に関してはフェイトとなのは、ユ

ーノ、クロノの全力の封印魔法を浴びることで正常化させる。
防衛体が存在しているということでリインフォースの当面の危険性は消滅した。しかし、アリシアのリンカーコアに寄生している状態の防衛体が今後一切暴走しないという保証はない。

遷章 第九話 E t e r n a l E t e r n a l C o f i n

アースラに回収された後、アリシアはリンディに謝る。

「申し訳ありませんでしたリンディ提督。私はあなたを疑ってしまつた。闇の書の永久凍結を計画していたのがあなただと誤解していました」

「確かに、疑われても仕方が無いわね。だけど、これからはもっと私を信頼してもらえるのかしら？」

「私は必要あれば誰でも疑います。ですからこれからもリンディ提督を疑うかもしれない。今の内に謝っておきます」

「そうね、もつと信頼してもらえるように私も努力するわ。それでどう？」

「ごめんなさい、ありがとうございます」

「気にしないで。それよりも、いい加減私のことはお母さんって呼んでくれないのかしら？ アリシア」

「むしろ姉さんと呼びたいですよ」

眠るはやての下、ヴォルケンリッターとリインフォースが話し合う。
「暴走は収まった、暴走体も沈静化し、現状では問題は無いはずだ」

「だが、防衛体は主はやてとお前から切り離されたはず、その防衛体が消えていないとすれば今どこにあるというのだ？」

アリシアが部屋に入ってくる。

「それは私の中で眠っている」

「テストロッサ……の姉か」

「私もテストロッサだよ、シグナム。まあ、名前で呼びにくかったらテストと呼んで」

「やはり、あなたでしたか」

「そういうことだね、リインフォース。闇の書の暴走した防衛体は今私の中にいる。いや、私が防衛体というべきかもしれないね。防衛体は私をコアとしてここにいる。今はただ暴走していないだけのこと」

「じゃあ、そのうちまた」

「うん、その可能性は低くない。まあさすがに一年後とか二年後とかの話じゃないけど、年を追うごとに可能性は高くなっていくのも事実だよ。仮に私が生きている間に暴走が無くても、私が死んだ瞬間に暴走が始まる危険性もある。どちらにせよ、このまま放置するわけにはいかないんだ」

「そして、防衛体が、あなたが消滅したとしても、私が再びそれを作り出すことになる。そうすれば同じことを繰り返すことになる」

「解決策はあるよ。といつても、それは未来に託すことになるんだけどね」

——この問題を何とか解決できるそのときまで、私が氷の棺で眠れ

ばいいだけのことだ――

「だから、みんなは残る。眠りにつくのは、私だけだ」(アリシア)

そのことは全員に伝えられ、アリシアはリンフォースと共に自分たちの封印を具申する。

直ちに反対するはやてとフェイト、なのは、ユーノ。

しかしアリシアは黙ってそれを聞き流す。

部屋から立ち去ったアリシア。未だクロノやリンディに詰め寄って作戦中止を訴えるなのは、フェイト、はやて。

黙るユーノを背中に見ながらなのは達は瞳に涙を宿しながら叫び続ける。

おもむろにユーノは立ち上がり、アースラから離れようとする。

驚いたなのは達は、すぐさまユーノを追いかけて、「どうして、ユ

ーノはお姉ちゃんを止めてくれないの？」

というフェイトにユーノは「僕だって止めたいよ！ だけど、アリシアの提案以外にどうしろっていうんだ！？」

「だから、探すんだ。後どれくらい猶予があるか分からないけど。僕は、僕なりのやり方で」

ユーノは無限書庫に向かうことを感じ取り、なのは、フェイト、はやてはそれに追従する。

ヴォルケンリッター達もはやてに続く。

ヴォルケンリッター達は「少し思うところがある」と、はやてにしばらくの暇を貰い、異世界へと旅立つ。

(行き先は明言されなかったが、彼らは古代ベルカ領王都ゼファ―

ド・フェイリアへ向かい、解決の糸口を探る)

それから三日三晩、ユーノ以外は交代で仮眠を取りアリシアのプラン以外に何とかなる方法を模索する。

途中、クロノが現れ、少しの間だけユーノ達を手伝う。「僕も、アリシアだけに背負わせたくない」

(防衛体の絶大な魔力によってアリシアは一時的にSSSランク相当の魔力を有する事になるが、逆にそれさえもアリシアの生存を脅かしていくことにもなる。未だかつて大規模災害級ロストロギアクラスの魔力を有する人間など存在しなかった)

厳正な協議の結果、アリシアの一時的な凍結封印が決定される。
当然ながらそれに反対するアースラチルドレンと夜天の集団だが、それはアリシアの恫喝によって黙らされる。

(ブリュドガランとゼルドガリスを返そうとするはやてだが、アリシアは君にあげるよ。有効に活用してくれといって彼女にそれらを託す)

しかし、ユーノは諦めなかった。何か方法があるはずだと無限書庫に向かう。なのはとフェイトもそれに追従する。

↓インテグラル・セグメンツの構築

シグナム達ヴォルケンリッターははやての許可を貰い、独自に動く彼等はグレアムより伝えられた忘れられた都、ゼファード・フェイリアへ向かう。

↓白紙の魔導書の入手

< 以下略 >

route BFR 構想

BFR「BeFore

Namesless Ghostの無印編。

冒頭

自分の代わりにベルディナが死に、その命を背負ってジュエルシードを回収しようとする。

魔力の不適合で力を失う。

ジュエルシードのモンスターと交戦で傷つき倒れる

・なのはとの出会い、レイジングハートの貸与

高町家に引き取られたユーノにレイジングハートはなのはに助けを請うべきだというが、ユーノはそれを拒否。

ユーノは、なのはが学校から戻るよりも前に書き置き（ミッドチルダ語なので読めない）を残してた高町家を出る。

帰ってきたなのはは、空っぽのバスケットを前にして呆然となる。その直後、ジュエルシードの発動を察知するなのは。

これを逃したら、もう会えなくなると直感するなのはは、制服のまま家を飛び出す。

神社での戦い：対暴走した駄犬戦

フェレットの姿でよろよと町を歩くユーノ

レイジングハートの苦言

うるさいというユーノ

ジュエルシードの発動

ユーノは神社へ

ユーノは最後の力を振り絞って人の姿に戻り、犬とやり合う。しかし、力が足りず、吹き飛ばされて朦朧となる。レイジングハートも手から離れ、転がっていく。

死を見るユーノだが、襲ってきた犬を桃色のプロテクションが守る。

なのはは人の姿のユーノに驚く暇もなく、犬を封印する

ユーノは再びフェレットの姿になって気を失う。

なのはは、急いで家に連れて帰り、恭也によって手当がされる。なのはが夜通し看病して、バスケットが置かれた机に寝そべって眠ってしまう。

早朝に目覚めたユーノ。側には机に頬をつけて眠るなのは。レイジングハートから説明を受ける＋お説教

ユーノは反論するが、いつの間にか目覚めていたなのはに頭を掴まれ諭される

「私も協力したい。させて欲しい。友達が苦しんでいるのを放ってはおけないよ」

ユーノはレイジングハートに対して、

「現時点を以てユーノ・スクライアのマスター権を破棄。以降は、なのはを正規マスターとして登録。レイジングハートは……なのはに託すよ」

「ありがとう、ユーノ君」

なのははユーノを胸に抱く。

夜、なのはが寝てしまってから、ユーノとレイジングハートは話し合う

レイジングハートは、

「しかし、ユーノが私をマスターなのはにたくすとは思いませんでした。自惚れているわけではありませんが、私は貴方にとってベルディナの形見だと思っていましたので。」

ユーノは

「確かに寂しいよ。ずっと一緒だったからね。だけど、こうするのが一番なんだ。レイジングハートはなのはを守ってあげて。絶対に無茶をさせないように」

「貴方が言うことですが、ユーノ。しかし、私のマスターである以上、ある程度の覚悟をしていただかなければ困ります。ですが、貴方の願いであれば受け入れないわけにはいきませんね。」

「それと、なのはにはベルディナのことは言わないでね」

「それは承知しております」

なのはの休日。サッカーの試合の観戦。

試合が終わり、喫茶店で打ち上げをするなのは、アリサ、すずか。なのははいじられるユーノを介抱しながらジュエルシードの気配を

感じる。

『ユーノ君、今のつて……』

『ふうう、どうしたの？　なのは』

『……………ううん。なんでもない』

その後、なのはは父、士郎と共に帰宅し、ユーノは散歩に行つてくるといつてなのはのもとから離れる。

このユーノは散歩といつておきながら、その実は一人でジュエルシードを探しに行った。

レイジングハートもなのはの疲労は由々しきことと思つていたのと、ユーノの魔力と体力がある程度回復して、魔力も若干ながら適合しているのを鑑みての同意。

その日は休日なので、ユーノくらいの少年が日中に外に出ていても不思議ではない。そのため、ユーノは人の姿に戻つてジュエルシードを探す。

例のゴールキーパーの子供からジュエルシードの気配を察したユーノだが、時遅く、交差点でそれは発動してしまう。タッチの差でユーノは封時結界を展開し、町への被害は最小限になる。しかし、ユーノはその結界を維持することで精一杯となる。

ユーノはなのはに救援を求める。

その救援を知つてなのは飛び起きて、すぐさま町に向かう。

ユーノが展開した結界をすぐさま発見して、その内部に。そこには幻想空間で崩れ去る町があつた。

もしも、この風景が現実で起こっていたらとなのはは背筋を震わせるが、ユーノの言葉。たぶん、さつき翠屋にいた選手の一人だと言ふことに驚く。

ユーノはジュエルシードの中心を指示し、なのはに封印の砲撃を放たせる。

ユーノの思惑通り、ジュエルシードはユーノを巻き込んで封印される。

結界は消滅し、ジュエルシードは無事なのはの手の中に入る。終わってなのははユーノを呼ぶが、ユーノは答えない。

レイジングハートの誘導に従ってなのはは、人間の姿で気を失うユーノを発見し、ユーノに縋り付いて泣きじゃくる。

何とか臍氣に気が付くユーノは一言、なのはが無事で良かったと言ってフェレットの姿に戻る。

なのははユーノを抱いて家路につく。

落ち込むなのはにレイジングハートが慰める。しかし、なのはは告白する。

私は知っていたと、知っていて見逃したのだという。ユーノのお蔭で町に殆ど被害はないが、その代わり、ユーノに負担をかけてしまった。ユーノの支えたい、負担を軽減したいはずがその逆をしてしまった。

ユーノは、ジュエルシードの回収に命をかけている。だから、自分もすべての力をかけようとなのはは決意する。

ユーノの体力もある程度回復して、なのははかねてより誘われていたずかとお茶会に向かう。

巨大にゃんこ事件勃発

発端は原作とほぼ同じ。

フェイトの出現で、なのはとユーノがタッグを組んでフェイトと交戦するが、対人戦闘でのタッグは全く訓練していなかったので割とあっさりと敗北する。

ジュエルシードを回収していくフェイトに大してなのは外資着wも売ろうとさせながら懇願する。

「まって、それは……ユーノ君が大切にしてる物なの。だから……持つて、いけないで……」

「……ごめん……」

フェイトのことをユーノとなのはは話し合う。なのははフェイトの悲しみを感じ、ユーノにはそれどころじゃないのにごめんと口にする。ユーノは気にするなといい「だって僕らはパートナーじゃないか」と、初めてその言葉を使う。

<ひとまずここまで>

Nameless Ghost IF ルート考察(1)

アリシア（5歳）が爆破事件の直前の御神家にとばされる

LOWのアリシア。魔剣ブリュドガランをもつ正統なアーク式魔術師。

アリシア・A・T・グラシア

名乗るときは、アリシア・テストロッサ

士郎は恭也とともに放浪の旅に出ている。

アリシアは、御神美沙斗に拾われ、静馬に引き取られる。

立場としてはただの居候で御神ではない。

士郎に関しては美沙斗から噂程度に聞いている。

帰る方法が見つからないアリシア。しかし、美由希や恭也、士郎といった知り合いのいる世界。さらには地球と言うことで、10年待てば時空管理局と接触できるだろうからそのときまで待つのも悪くないと若干気楽に構える。

まあ、それにうまくいけばPT事件や闇の書事件をよりよい結果に導けるわけだから、それはそれでOKだと思う。

御神の家での一年の生活。アリシアは居候の身の上だが、本来落ち着いた人当たりや武術に対する理解からそれなりに受け入れられている。

そして、1年後。熱を出して病院に行く美由希につきそうアリシ

ア。

美沙斗には自分がいるからといって一族の会合に参加するように説得する。静馬も心配していたが、アリシアがいるなら大丈夫だろうと思い美沙斗を呼び戻す。

そして、発生したテロ。爆破され、一族を皆殺しにされた御神。突然消え失せた家族にアリシアは呆然とする。

あのとき、自分が美沙斗に美由希を任せていれば彼らは死ななくてすんだ。後悔と復讐の思いが胸をよぎる。しかし、傍らで無く美由希を見れば、これを捨てて旅に出ることなど出来ない。

（実は美沙斗は生きている。そして、美由希をアリシアに託して自身は復讐の旅へ）

士郎と合流するアリシア。

このときアリシア6歳。恭也とは同年で美由希は3歳。

美由希は御神から不破になり、アリシアはそのままアリシア・アイク・テストロッサ・グラシアであり続ける。

アリシアは士郎に連れられて恭也、美由希とともに放浪の旅に出る。

恭也と同年であり、その大人びた性質から何となく恭也と美由希の姉という立場に落ち着く。

フィアッセとの出会い。

ボディーガードとしてイギリスに向かう四人。

そこで出会う少し年上のフィアッセ。アリシアは同じ白人同士として結構仲が良くなる。

フィアッセ↓アリシアをアリイと呼ぶ

アリシア ↓フィアッセをフィーと呼ぶ。

エリスとは何となく犬猿の仲に近い。

高町桃子との出会い。

クリステラ議員に派遣される暗殺者。士郎は襲撃者に対応しており、アリシアはその暗殺者と一戦交える。

士郎でも見抜けなかったアリシアの戦闘能力の高さが証明され、士郎は恭也と同じように彼女に御神流を教えようとするが、アリシアはそれを辞退。

「私は、御神ではありませんでしたし、それを背負う資格もありませんから」

士郎と桃子の結婚。

アリシアは高町になるかどうかの選択を迫られる。
タイムテールは残り数年。そうならば自分は地球から離れることになるはずだ。

しかし、このぬくもりを手放したくはない。

自分には翔天の王としての責務がある。しかし、自分はこの家族を守る剣でもある。

そして、御神を皆殺しにしたテロリストへの憎しみも癒えないまま帰るわけにはいかない。

結局アリシアは高町の名前を受け入れ、高町アリシア・テストロツサと名前を変える。

なのはの誕生間際。にわかを訪れる平穩にアリシアは復讐心を忘れかけていた。

そして、なのはが生まれる数ヶ月前。士郎の殉職の報が入る。

アリシアは士郎が一時期大けがで生死の境をさまよっていたということは聞いていたが、死ぬとは思わなかった。

これは、私という異物が混じることで生じたイレギュラーなのか
と思い悩む。

そして、強くなりたいと願う恭也とともにもうこんなことは繰り返さないという誓いの下に彼とともに修練を開始することとなる。

アリシアは御神と不破で剣術を習わなかったが、士郎や静馬、美沙斗の動きをよく見ていたので恭也の修練の手助けになった。

それでもアリシアは御神流を習得するつもりはなかった。彼らの歴史や誇りに土足で踏み込むつもりはなく、どちらにせよ非才の身の上では同じ土俵に立ってはいはならんで歩くことは出来なかったからである。

恭也の交通事故

車と衝突しそうになった恭也。

フラッシュバックするユーノの姿。

結局、アリシアは何も考えずにそれを守り代わりに負傷。

恭也に埋め込まれる罪悪感。しかし、アリシアはそれを笑い飛ばしてしまう。

「いや、恭也が無事なら私は言うことはないよ」

「だったら約束しようか。将来、私が絶体絶命になったら、そのとき恭也に助けてもらおうよ」

アリシアは1年間の通院とリハビリを行う

その間、恭也は自らを鍛え直すために修行の旅に出る。

その修行で恭也は神速の極意をつかむが、その多用により体がぼろぼろになりかける。

身体強化が出来ない生身であれを多用するのは無謀だとアリシアは思うが、それが御神の業の一つであるなら何も言えなくなる。

結果的に恭也は膝を壊してしまう（原作ほど深刻ではないにせよ）

恭也と神崎那美の出会い。

アリシアは修行中、ほとんど置き去り状態にされていた家族を思いやり、恭也には剣の道を、自分は家族を守ると約束し、恭也とは別の道に行く。

「恭也は、もう分かったよね。自分が無茶をすればみんなが悲しむって」

「ああ。本当にすまなかった。俺はもう、金輪際こんなことは繰り返さない」

「うん、それなら私は恭也を応援できる」

「応援？」

「恭也、君は剣の道を歩んで。家族は私が守るから。一人で両方背負うのは難しいから、役割分担しよう」

「ありがとう、姉さん」

原作開始

恭也は一年間の修行で留年。アリシアも一年間をリハビリに費やしたので同じく留年し、恭也とともに高校三年生になる。

アリシア18歳。その姿はSTSのフェイトにそっくりで、金髪赤眼、容姿端麗、プロポーション抜群で噂になるほど。しかし、本人は学業に関しては適当で、原作恭也と同じ頻度で授業中に居眠り

をするなど。

性格もめちゃくちゃ気さくなので、それほど近寄りがたいと言うことはない。

美由希と恭也の修行にはサポートに回る程度で、恭也が美由希を鍛えるようになって以来それほどつきあってはいないが、時々恭也とやる模擬戦ではあの手この手捌め手で今のところ黒星はない。

「いや、恭也が本式に私を殺しに来たら私ではなすすべもないさ」

「そういつて姉さんは勝たせてくれないが」

「そのあたりは姉として威厳を見せないかね」

友人の赤星、恭也のつてで知り合った月村忍。

アリシアはすずかのことについては知っていたが、元の世界でもそれほど交流が無く、姉のことは知らない。

アリシアの放課後は近場の本屋でのアルバイト

美由希と並ぶほど本が好きで、地球の言語や次元世界の言語すべて含めておおよそ40カ国語に精通するアリシア。

そろそろかと感じるアリシア。

正史通りに事が運ぶのなら、後一年から二年以内にこの街にジュエルシードがまかれ、ユーノ・スクライアがこの世界に訪れる。

そして、時空管理局が現れ、自分は一度死に復活する。何とかして管理局と接点を保たなければならない。元の時間に帰るために自分はここまでできた。しかし、それでいいのかと思ってしまう。仮に戻れるとして自分はここで作ってきた家族や絆を捨てて帰ることが出来るのかと思う。

しかし、自分は元の世界での責任がある。

どちらにせよ、同じ時間に同じ人物がいることは良くないことだ。

アリシアはそれを考えながら、ゆつくりと準備を始めることとした。

アリシアはジュエルシード事件に関する詳細を知らない。そのため、すでにイレギュラーだらけとなったこの世界でどのように行動するべきなのか具体的な策は何も立てられない。

すでに士郎が死に高町家の歴史は大きく変わった。

見慣れない同居人、フィアッセ、晶、レン、狐の久遠に神崎那美。もうこれ以上の変革は許されないだろう。しかし、もしも家族が苦しみ傷ついているのを自分は黙って見過ごせないだろとも思う。

この13年間はいろいろなことがありすぎた。背負うものが増え、去りがたくなる。果たして自分は元の世界に戻りたいのか、ここにとどまりたいのか、アリシアは分からなくなってしまった。

「アリシアおねーちゃん！」

「ん？ ああ、なのは塾帰り？」

「うん。ただいまおねーちゃん」

「ただいまは家に帰ってからだよ。それに、アルバイト中はあまり顔さないように言っていたよね？」

「えー、でもお」

「ふう、やれやれ。店長、少し休憩とっていいですか？」

「ああ、妹さんね。大丈夫よ」

「じゃあ、少しどこかで休もう」

「うん！」

恭也と美由希が修行に明け暮れていた頃、なのはの面倒を見てい

たのはもっぱらアリシアだったので、なのははアリシアに一番なっている。

アリシア↓恭也にとっては厳しい姉。美由希にとっては頼りになる姉。なのはにとっては甘えさせてくれる姉。

「あー、アリシアちゃん。今日はもう上がってもいいよ。もうお客さんも来ないだろうからね」

「いいんですか？」

「いつも頑張ってくれてるからねえ。いつそのこと私は隠居してアリシアちゃんに任せたいくらいだよ」

「いや、後継者を見つけてくださいよ」

「いたら苦労はしないねえ」

なのはと一緒に帰るアリシア。

一緒に下校中だったなのはの友人、アリサとずずか

なのははアリシアに手を引かれ、「あのね、あのね」と一生懸命学校であつたことを話す。

アリサは「なのははシスコン過ぎない？」といい、ずずかはそれを笑顔で見守る。

やっぱり自分は手放せないかもしれないと思うアリシア。

休日、バイトもなく海鳴り臨海公園でぶらぶらとするアリシア。恭也が忍と話しているところを見る。

「やあ、恭也。それに月村か。デート？」

「あ、テストロッサさん」

しばらく三人で談笑。

アリシアは給料日ということで二人に屋台の食べ物で大盤振る舞い。

そして帰る忍だが、その途中、二人の目の前で忍は誘拐されてしまう。

アリシアは近くに止めてあった車のガラスを割り内部に侵入し、キーを直結させてエンジンを動かす。

相変わらずやることが過激だとこめかみを押さえる恭也もそれに乗り込み、アリシアの運転で誘拐犯を追走する。

町中でド派手なカーチェイスを繰り広げ、忍は無事に回収され、誘拐犯はアリシア、恭也とともに無事にお縄についた。

車の盗難、暴走行為、10件以上の交通法規違反（アリシアは各種運転免許は取得済み。ヘリの操縦から大型タンカーの操船も免許はないが操縦可能）。誘拐犯を捕まえたのはお手柄だったが、下手をすれば一週間の拘禁か、少年院送りだ。

しかし、それらは突然現れた上司によって罪状が破棄される。

そして、警察署の前で待ちかまえていたノエルというメイドによって二人は連行され、月村の屋敷に連れて行かれる。

そこで会うなのはの友人すずかとクラスメイトの忍。

そこで言われること。誘拐犯から救ってもらってありがとうと言うこと。そして、このことは忘れて欲しいということ。

巻き込みたくないという忍に、すでに巻き込まれているんだがねと軽く返すアリシア。

そして、アリシアは恭也に。「で、どうする？ このまま引き下がる？」

恭也は「わかりきったことを聞かないでくれ、姉さん」
「まあ、そうだろうね。」

恭也は忍のボディーガードを立候補する。アリシアも男の恭也ではカバーしきれないところがあるだろうから、私も協力するよと伝える。

それに、私達に関わる限り、高町の家にもどう影響が出るかわからないからね。

二人ならかなりフレキシブルに動ける。

「まあそれに、友人を放っておけというのはなしだ」

引き下がらない二人に忍は一つの試験を申し渡す。

現在側近であるノエルよりも優秀でなければボディーガードとして雇う必要は無い。

「何なら二人一緒でもいいよ？」

ノエルに関しては絶対の自信がある忍は挑発するように言う。

まずは前座としてアリシアVSノエル。

アリシアはブリュドガランを使わず、徒手空でノエルとやり合う。確かにいい動きをし、ノエルとも一進一退だがアリシアは結局敗北。

しかし、続く恭也はノエルと最後まで決着がつかなかった。

本来なら人間では手も足も出ないはずのノエルが勝てなかった。そして、ノエルの判断から、アリシアは本来なら武器を使って戦うことが主流であるはずと言われ、アリシアはすつとぼけて口笛を吹く。

試験は合格。それどころか、特級レベルのボディーガードが雇え

て（しかも報酬は安い）月村としては非常に得をする。

学園での忍との交流

付き合ってみると忍は割と気さくで、お茶目な部分もあると知ったアリシアと恭也。

アリシアは忍と共謀して何かと恭也を使っていたずらを仕掛けるも毎回恭也に呆れられて終わる。

恭也はアリシアでその手のいたずらにはなれていたので対応も冷静なものだ。

忍が夜の一族だと知る

アリシアは特に反応なし。本式で人外のもの（ある意味自分自身）とか、人間でさえないもの（レイジングハート）と割と交流もあったため、今更驚くこともない。

が、とりあえず礼儀としてもものすごく驚いたふりをする。

「アリシア、あんた絶対驚いていないでしょ」忍

「あ、分かる？ いや、こういうときは驚いておくのが礼儀かと思っ
つて」

「そんな礼儀いらない」

「だろうね、悪かった」

「なんか、真剣に悩んでたのが馬鹿みたい」

「馬鹿だな」

「ノエルに殴らせるわよ？」

「それは痛そうだから遠慮するよ」

「置いてけぼりですね、恭也様」
「いや、姉さんならこうなると思っていた」

イレイン登場

苦戦する恭也とノエル。

恭也は電磁鞭で行動不能。ノエルも腕をちぎられる。

アリシア登場。アリシアは不敵に笑い、「こういう人外とやり合うのにはなれている」といってイレインとやり合う。

久方ぶりにブリュドガランを起動させ、獅子奮迅。

腕が折れようと、足が使い物にならなくなっても、片目がつぶさされてもアリシアは口元に笑みを浮かべながら戦い続ける。

回復した恭也、腕に応急処置を施したノエルも再び参戦し、イレインは行動不能になる。

イレインは忍の手によってモジュールが復活させられ、すずかの側近のファリンとして生まれ変わる。

戦闘終了後、再び入院してリハビリをするアリシア

右腕が複雑骨折となり、左足は割と綺麗に折れているが重傷。あばらや骨盤には何十力所かの亀裂が走り、額や太もは何針も縫わなければならない大けが。さらに負傷した右目は失明寸前だった。

一週間の入院の後、足の骨がすっかりくつつくまで車いす生活が余儀なくされ、それでもアリシアは根性で学校に行く。

これ以上留年して面倒なことになってたまるかという理由。

相変わらずのパワフルさに啞然とする高町家一同。
なのはは入院したアリシアを見て思い切り泣いていた。

「アリシアおねーちゃんは、どこにも行かないよね？ おとーさん
みたいに私の知らないところに行っちゃわないよね？」

「大丈夫だよなのは。私は死なないように出来ているんだ」

「そんなわけあるか！」恭也

「そうだよアリシア姉さん」

「アリイはもう少し言葉に気をつけて」

「相変わらず私には厳しいなフィーは」

「アリシアちゃんがなくなったら、私も悲しいです」レン

「俺も」晶

久遠たたり事件

入院中で手出しが出来なかった。

レンの手術事件

この事件では表に出ずに、晶をけしかけて話をさせる。

「レンを説得できるのは、やっぱり晶しかいないと思う。私が出る
には少し立場が違いすぎるし、そもそも私には人を説得するような
人徳なんて無いよ」

晶の野望事件

「恭也の蒔いた種だ。自分で何とかしてくれ」

と言いながら晶が恭也との決闘のため、入院中のレンに代わって
晶の特訓に付き合う。

「アリシアさんは、俺が御神流を習うの賛成なのか？」

「反対をする理由はないただよ晶。それに、晶は昔恭也と約束したんだろ？ だったら約束を果たしてもらえば良いんじゃないかな？」

「だけど……」

「まあ、姉としての意見で良いなら、一度ぶつかってすつきりしておけと言うのが順当かな」

「アリシアさんはずるいや。いつも自分だけ分かった風にしてさ」

「私も、そのあたりは改善しないと思うんだけどね。どうにもうまくいかないんだ」

「やっぱり、アリシアさんは不器用だ」

「晶も、相当に不器用だと思うよ？ だけどまあ、うちで一番不器用なのは」

「美由希ちゃんだね」

「ご名答！ さて、もう一戦行こうか。私もそろそろ感覚が取り戻せそうなんだ」

チャリティーコンサート事件

フィアッセの夢の実現、十何年ぶりの再会となる御神美沙斗。

復讐鬼となった美沙斗。

生きていたのなら、なぜ知らせてくれなかったのかと言うアリシアに美沙斗は非情な答えを返す。

恭也と美由希、アリシアを振り切り離脱する美沙斗。

アリシアは心の底から美沙斗を救いたいと思ったが、先のイレインの事件以降、そのときの後遺症がまだ抜けきっていなかったため戦える状態ではない。

それでも剣を取ろうとするアリシアに、恭也は待ったをかける。

「美沙斗さんのことは、俺と美由希が何とかする。姉さんは見守っていてくれ」

「ふ、いい男になったね恭也。さすがに、今回は二人に任せるよ。私は、フィー達の護衛に回るさ」

美沙斗さんをよろしく頼むと恭也に託すアリシア。恭也は力強く頷き、美由希と共に特訓を行う。

コンサート当日。アリシアはクリステラ親子の直属の護衛官として会場に入る。

しかし、その中で、誰よりも人の気配に敏感なアリシアは美沙斗の到着を感じる。

アリシアは、少し用を足してくるといったたん親子の側を離れ、美由希に護衛を任せる。

美沙斗の前に立つアリシア。美沙斗とアリシアの会話。

美沙斗は障害を排除するためにアリシアに斬りかかるが、それに恭也が介入する。

「任せろと言ったはずだ。どうしてここにいる、姉さん」

「戦うつもりはないよ。ただ、最後になるかもしれないから少しだけ話がしたかったんだ。それに、私が戻るまで美由希はフィー達の側を離れられないから、むしろ恭也にとっては好都合だっただろう？」

「……」

「考えることは誰しも同じだよ。高町家はそれだから暖かい。それじゃあ、健闘を祈る」

フィアッセの元に戻るアリシア。美由希と仕事を代わり、美由希

はすぐさま恭也の元へ。

爆発しそうな廃ビルから恭也と美由希を助けたフィアッセ。白く輝く翼。フィアッセに懇願され、そこまで護衛したアリシアはそれを見上げてまぶしく思う。

そして、戻ってきたコンサート会場。すでにコンサートは終わっており、フィアッセは夢を果たせないかと思われた。しかし、残っていたクリステラスクールの面々とティオレ。フィアッセは高らかに歌い上げる。

アリシアは、何も言わず立ち去ろうとした美沙斗の前に立ち二三言葉を交わす。

- ・ 貴方が死んだと思って世界が終わったかと思った。
- ・ 美由希をあんなに立派に育ててくれてありがとう
- ・ 私なんてちよっとお手伝いをしたただだよ、土郎さんと恭也、桃子さん、高町家のみんながいたから美由希はあんなに明るくなったんだ。
- ・ いずれ笑って会えるように、私も頑張る
- ・ 気長に待っているよ

事件は終わり、美由希は奥義の極”閃”を体得し、美沙斗は罪の精算のために香港に戻り、香港警防隊に所属して龍^{ロン}の壊滅のために行動を開始する。

美沙斗のことで複雑な表情を浮かべるアリシアだが、恭也にそれを聞かれたとき、「次合うときにはきつと笑いながら酒を酌み交わすことが出来るさ」と口にする。

一年後、恭也は大学へ進学。アリシアは進学はせずに、そのまま翠屋の手伝い（歌手として活動し始めたフィアッセのバックアップのためもある）をはじめとした家事手伝い。

リリカルの世界の始まり。

・なのはにもたらされるレイジングハート

・伝説と呼ばれた大魔導師にして技術者プレシア・テストロッサの娘アリシア・テストロッサと、アリシアの娘であるフェイト・テストロッサ

（アリシアは女手一つでプレシアに育てられ、その娘フェイトもアリシアが女手一つで育てた）

・師匠であるアリシアと袂を分かち、イデアシードを持って逃げてきたユーノ・スクライア

・それを追跡するフェイト

・クロノはアリシア、ユーノとヒドゥンに対抗するためのすべを模索していた。

・そして、クロノとアリシアはイデアシードに着目し、それをエネルギー源とした方法を試そうとしていたが、ユーノはそれに反発。

・技術者としてユーノとクロノは兄妹弟子のようなもので、アリシアの娘のフェイトとは非常に仲が良い。

・さらに、ユーノは孤児で、フェイトが生まれてしばらくしてアリシアが拾い、育てる。

・ユーノはフェイトの弟のように育てられた

・クロノ・ハラウンはリンディ・ハラウンの息子。

・世界に襲いかかるうとしている次元災害：ヒドゥン

「分からん！ この世界は、いったいどうなっている！？」

・幼い頃のアリシアにそっくりなフェイト。

・厳しくも優しい姉に似た少女と争い会うことを嫌うのは。

プレシア（49歳）＞ミッドのアリシア（31歳）　リンディ（年齢不詳）＞海鳴のアリシア（見た目19歳）＞クロノ（9歳）＝フ
エイト（9歳）＝ユーノ（9歳）＝なのは（9歳）

ミッドのアリシアも年齢不詳なほど見た目が若く、海鳴のアリシアと一見すれば見分けが付かないほど若々しい。

故に、ユーノが最初海鳴のアリシアを見たとき、ビッククから扱いて逃げようとしてしまう。

フエイトとアリシアの出会い

「やあ、初めまして」

「……………母さん？　こっちに來てたの？」

「……………私は、そんなに老けているように見えるのかな？」
本気で悩むアリシア。

「あ、あの……………」

「まあいいや。ひとまず、ここは引いてくれないかな。うちの妹が怪我をしているし、勝敗は付いた。これ以上やるといふのなら、私も黙ってはいないけど、どうする？」

「は、はい、分かりました母さん。撤収します」

「だから母さんじゃないってば」

・ユーノの話聞いた後、アリシアは自分は時間旅行者ではなく次元漂流者なのではないかと疑うようになる。

どう考えても、自分の影響の及ばない部分まで変化が生じているようだ。

ミッドチルダもアリシアの知る場所とは異なる部分が多い。時空

管理局という組織も存在せず、ミッドチルダはあくまで次元を連合する国家の宗主国であるだけで、全時空世界を管理運営しているわけではない。

・ユーノは逃げ出す際にイデアシードの発動に巻き込まれ、クロノのことアリシアのこと、フェイトのことを恣意的に忘れさせられている。ただ一つ、イデアシードとは危険なもので、絶対に回収しなければならぬ、誰にも渡してはいけないというものということだけ。

・クロノと協力してイデアシードの回収、記憶の蒐集に当たるフェイト。

・フェイトはクロノが好きで、ユーノはフェイトが好き。そして、クロノはなのはのことが気になり、なのはもクロノのことが気になる様子。

・ユーノはフェイトのことを覚えていない。しかし、彼女と目を合わすことで、自分の中に何かよく分からない感情が励起されることを感じていた。

・そして、クロノのことを氣にくわないと思う感情。最初それは、なのはを妨害する彼に対する感情かと思われたが、それはフェイトがクロノが好きなことを僅かに覚えていたからである。

クロノ↑↓なのは

→

フェイト↑ユーノ

・リンディ・ハラオウン。クロノの計画には反対しつつも、最高行政官として私的な行動に出ることは出来ず、ユーノに期待を寄せる。

・事件終了後、なのはの助力で消失するヒドウン

・元の世界に帰るユーノ、フェイト、クロノ

・涙のわかれ。いつか必ず会いに来る。なのはを迎えに来ると約束するクロノ

・それをどこか複雑そうな目で見えるフェイト

・やっぱり、フェイトはクロノを忘れられないのかと思うユーノ

・ミッドチルダからの迎え。リンディ、プレシア、そしてアリシア

「やあ、この世界の私」

「こんにちは、異世界の私」

「ということは、この世界は私の世界ではないということが判明したわけか」

「ええ、あなたが言った14年前、確かにあなたはここではないどこかの次元からこの世界に漂流してきたみたいだった」

「帰る方法は？」

「今のところ無いわ。母さまとリンディにも手伝ってもらったけど、あなたが来た世界の座標が分からないの。少なくとも、私達が認識している時空間の座標には存在しない場所だった。探せば見つかるかもしれない。だけど、私達には探す手段がない」

「そうか……帰れないのか」

「私達の所に来る？ 今回の事件の功労者として出来る限りのことはしたいわ」

「そっちに行って、次こっちに帰ってこれるのはどれだけの時間が必要なんだ？」

「そう滅多なことでは返してあげられないのは確かね」

「だったら……こっちで暮らすさ。私も高町だからね」

・ 6年後、クロノとなのはの再会。
ユーノとフェイトも大人になって戻ってきて、二人とも地球で暮らすらしい。

フェイトから手渡されたこの世界のアリシアからのレポート。6年間、彼女はアリシアが元の世界に戻る方法を模索していたが、そのどれもが実現不可能なことだったという報告。

・ アリシアはあの後、海鳴に帰ってきた美沙斗と共に香港に渡り、警防隊として正義の仕事をしている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1548o/>

魔法少女リリカルなのは～Nameless Ghost～（設定資料集）

2010年10月9日10時59分発行